

郡山城第36次

大職冠地区発掘調査概報

(近世墓の調査)

1994. 3

大和郡山市教育委員会

郡山城第36次
大職冠地区発掘調査概報
(近世墓の調査)

1994. 3

大和郡山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、大和郡山市南郡山町字大職冠414-1ほかで実施した、発掘調査の概要報告書である。

2. 調査は往西啓治氏（大和郡山市美濃庄町118）のスーパーマーケット建設を契機とし、同氏の委託に基づき、大和郡山市教育委員会が受託事業として実施したものである。

3. 調査期間、および調査面積は以下の通りである。

・調査期間

（試掘調査） 平成5年3月3日

（本調査） 平成5年4月5日～同4月30日

・調査面積 約400m²

4. 調査は、下記の組織で実施した。

・現地調査

（調査員） 山川 均

（補助員） 本村充保、佐藤亜聖（以上奈良大学）、武田浩子

（作業員） 堀川正治、米田利男、市井義治、岸田勝信、谷潤喜一、喜多美寿子、米田郁子、藤川ミツエ、杉岡雪子、杉岡克子

・事務

大和郡山市教育委員会 社会教育課

5. 本書は、以下の分担で作成した。

（製図） 武田、本村、佐藤、山川

（執筆） 山川

（編集） 山川

6. 調査に際しては（株）大忠建設（大和郡山市藤原町2-18）より多大なご協力を得ました。また、現地調査、ならびに概報作成に際しては、下記の方々より貴重なご指導、ご教示を頂きました。記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。

今尾文昭、内田九州男、大鎌淳正、近江俊秀、川口宏海、佐久間貴士、嶋谷和彦、鈴木公男、鈴木秀典、西山要一、松尾信裕、森毅、森村健一、米田弘義。

本文目次

Iはじめに	
1 調査の契機および経過	1
2 調査地の環境	2
II調査の概要	
1 層序	3
2 下層構造	3
3 上層構造	34
4 包含層出土遺物	39
IIIまとめ（考察）	
1 調査地における土地利用の変遷	40
2 「和州赤ハタ」の印銘を持つ陶器（片）について	45

図表目次

図1 大和郡山市の位置	図16 墓-03出土土鈴実測図	11
図2 調査地点位置図	図17 墓-03出土錢貨拓影	11
図3 郡山城復元図および調査地点位置図	図18 墓-04土器棺（瓦質土器甕）実測図	11
図4 基本土層柱状図	図19 墓-04出土土師皿実測図	11
図5 検出構造平面図	図20 墓-04出土錢貨拓影	12
図6 墓-01平面図および土層断面図	図21 墓-05平面図および断面図	12
図7 墓-01出土土師皿実測図	図22 墓-05土器棺（瓦質土器甕）実測図	13
図8 墓-01出土錢貨拓影	図23 墓-05出土土師皿実測図	13
図9 墓-02平面図および土層断面図	図24 墓-05出土錢貨拓影	13
図10 墓-02土器棺（瓦質土器甕）実測図	図25 墓-06・07平面図および土層断面図	14
図11 墓-02出土土師器実測図	図26 墓-06出土土師皿実測図	15
図12 墓-02出土錢貨拓影	図27 墓-06出土錢貨拓影	15
図13 墓-03・04平面図および土層断面図	図28 墓-07出土錢貨拓影	16
図14 墓-03土器棺（瓦質土器甕）実測図	図29 墓-08平面図および土層断面図	17
図15 墓-03出土磁器実測図	図30 墓-08出土土師皿実測図	17

図31 墓-08出土土鈴実測図	17	図64 溝-01土層断面図	34
図32 墓-08出土銭貨拓影	18	図65 排水施設-01平面図および断面図	34
図33 墓-09平面図	18	図66 排水施設-01出土瓦質土管実測図	35
図34 墓-09出土土師皿実測図	18	図67 池状遺構断面図	35
図35 墓-09出土銭貨拓影	19	図68 池状遺構出土遺物実測図1	36
図36 墓-10平面図および土層断面図	19	図69 池状遺構出土遺物実測図2	36
図37 墓-10出土土師皿・磁器碗実測図	19	図70 池状遺構出土遺物実測図3	37
図38 墓-10出土銭貨拓影	20	図71 池状遺構出土銭貨拓影	37
図39 墓-11平面図および断面図	21	図72 包含層出土磁器実測図	39
図40 墓-11出土土師皿実測図	21	図73 絵図に見る調査地周辺の状況	41
図41 墓-11出土木製数珠玉実測図	21	図74 「赤瀬」印銘を持つ陶器実測図	45
図42 墓-11出土銭貨拓影1	22		
図43 墓-11出土銭貨拓影2	23	表1 郡山城関連年表	43
図44 墓-12平面図および断面図	24	表2 出土遺物観察表	49
図45 墓-12出土土師皿実測図	24	表3 出土遺物観察表	50
図46 墓-12出土太刀実測図	25~26	表4 出土遺物観察表	51
図47 墓-13平面図および土層断面図	27	表5 近世墓出土銭貨組成表	52
図48 墓-13土器棺(瓦質土器壺)実測図	27		
図49 墓-14平面図および土層断面図	28		
図50 墓-14土器棺(瓦質土器壺)実測図	28		
図51 墓-15・16平面図および断面図	29		
図52 墓-15土器棺(瓦質土器壺)実測図	29		
図53 墓-16土器棺(瓦質土器壺)実測図	29		
図54 墓-17平面図および土層断面図	30		
図55 墓-17土器棺(瓦質土器壺)実測図	30		
図56 墓-18平面図および土層断面図	30		
図57 墓-18土器棺(瓦質土器壺)実測図	30		
図58 墓-19平面図および断面図	31		
図59 墓-19出土銭貨拓影	31		
図60 墓-20平面図および断面図	32		
図61 墓-20出土銭貨拓影	32		
図62 墓-21平面図および断面図	33		
図63 墓-21出土銭貨拓影	33		

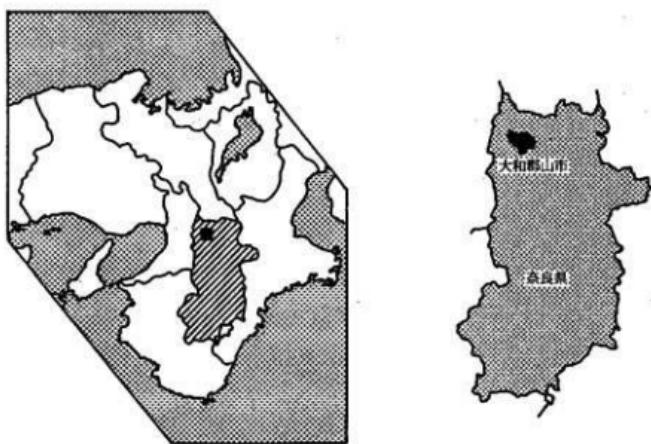


図1 大和郡山市の位置

I はじめに

1 調査の概要および経過

今回の調査は、民間の大型小売店舗の建設を契機として実施されたものである。同事業の計画予定地（面積2560.6m²）が周知の埋蔵文化財包蔵地「郡山城跡」に含まれるため、事業主体者より文化財保護法に規定する届け出がなされ、その後、同者の要請に基づき、大和郡山市教育委員会が、対象地において平成5年3月3日に地下構造等有無確認のための試掘調査を実施した。その結果、事業対象地の地下に造構、および良好な包含層（いずれも近世期）の存在を確認したので、大和郡山市教育委員会は、ここでは本調査が必要であると判断し、事業主体者にその旨を通知した。

本調査は、事業主体者と大和郡山市の協議により、市教育委員会が受託事業としてこれを執行することとした。なお、本調査の範囲については、建築物の建つ区域（地下造構に影響する範囲）に限定するものとし、事業地内においても駐車場等の範囲、および崖端付近等の危険区域は本調査範囲から除外することとした。結果、本調査の面積は約400m²となった。なお、調査期間については事業主体者側の強い要請により、きわめて短期間にこれを行うこととなった。このため実際の調査については、17～18世紀前半代のもの（ここでは近世墓）に重点を置かざるを得ず、18世紀末～19世紀の造構（屋敷地関係造構）についてはいずれも部分的な調査しか行い得なかった。調査は平成

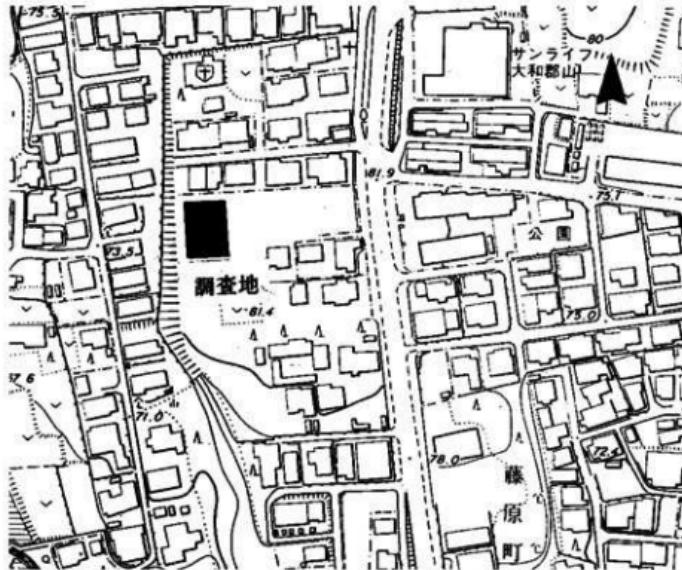


図2 調査地点位置図 (S : 1/2,500)

5年4月5日より30日までの約一ヶ月間実施した。

2 調査地の環境

調査地は、上部大阪層群より成る西ノ京丘陵の南端部付近にあたり、同丘陵では最も標高が高い地域である（標高約80m）。地形的には頂面のフラットな段丘状地形を呈し、人類の居住には比較的好適な条件を備えている。この周辺では、現在把握されているもので弥生時代中期に遡る遺跡が確認されており、また同後期には相当数の遺跡が存在したようである（ただし、いずれも郡山城および城下町の造営による人工改変によってその具体像は不明である）。古墳時代の遺跡としては、西ノ京丘陵のはば南端に新木山古墳（前方後円墳、全長122.5m、現在陵墓参考地）がある。なお、古墳時代の集落跡としては、丘陵西側の低位段丘面上、富雄川の氾濫源に接する位置に東城遺跡があり、そこでの集落は飛鳥・藤原時代まで存続する。

今回の調査地は「郡山城跡」の西側縁にあたる地であり、調査地の約10mの崖下（つまり西ノ京丘陵の西側断崖）を外濠の違存地割が南北に通っている。なお、城下絵図等に見る調査地周辺の土地利用の変遷についてはⅢ章考察編において試みているので、ここでは割愛する。

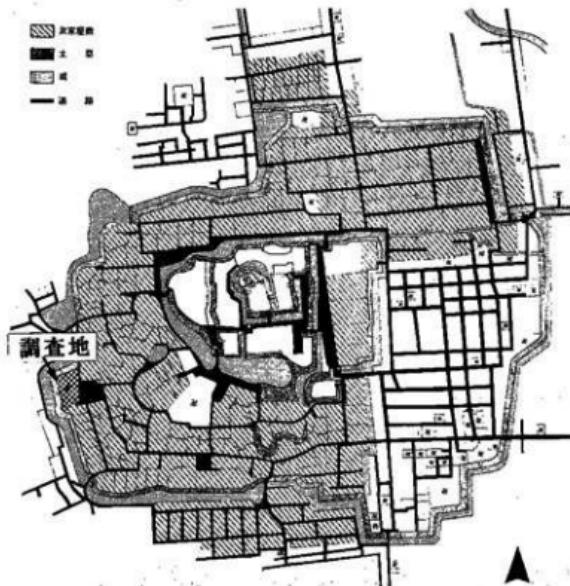


図3 郡山城復元図および調査地点位置図
(享保9年絵図より作成)

II 調査の概要

本章においては、今回検出した代表的な遺構を、その時期によっておおきく上層遺構、下層遺構に分け、それぞれの時期ごとに、各遺構の規模、形状、出土遺物等について述べる。

1 層序

各遺構の具体的な記述に先立ち、今回の調査地における基本的な層序について説明を加える。①層は、ごく最近の駐車場造成に伴う盛土層である。また、②層は当該地が日本電信電話公社の資材置場となった際（昭和30年代）の盛土層である。以上の2層を除去すると、直ちに遺構検出面である③層もしくは地表面の④層が露呈する。

今回の調査では①～②層は重機によって除去した。

2 下層遺構

今回の調査では、近世（17世紀後葉～18世紀前葉）の土葬墓を計21基確認した。調査地周辺の土地利用の変遷については、続章において検討を加えるが、この時期においては該地周辺はあまり人工改変が加えられておらず、いわば自然の丘陵をそのまま墓域として利用していたようである。該地が居住地として利用されるようになり、その前提として人工改変が加えられるのは、後に述べる上層遺構の時期（18世紀末～19世紀中葉）であり、下層遺構の土葬墓群はこの段階でおおきく削平を受けるか、もしくは破壊されている。したがって以下に報告する墓の事例については、その遺存状況は必ずしも良好なものばかりではなく、遺構の上半部を削平されたものや、遺構の一端を失ったものが多く含まれている。

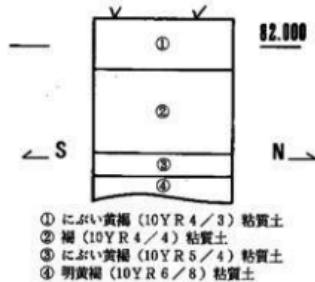


図4 基本土層柱状図 (S : 1/20)

- ① にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土
- ② 灰 (10YR 4/4) 粘質土
- ③ にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘質土
- ④ 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土

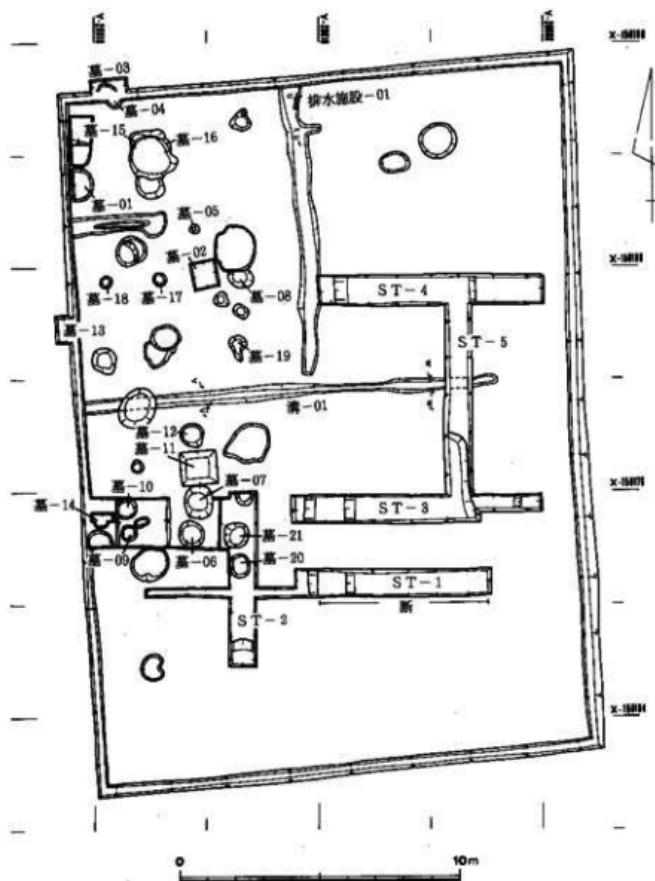


図5 検出構造平面図 (S : 1/200)

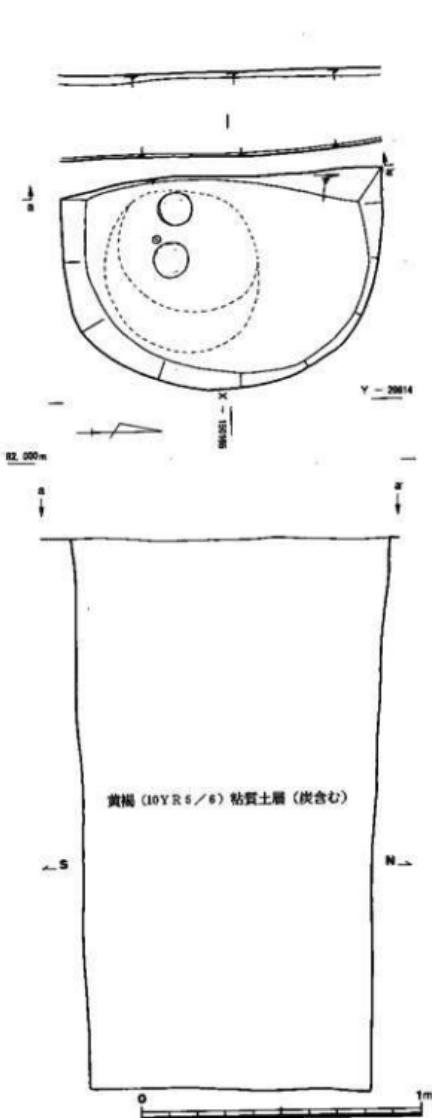


図6 墓-01 平面図および土層断面図 (S : 1/20)

(1) 墓-01

a 遺構 (図6、図版2)

墓-01は、調査区の北西隅において検出した土坑墓である。遺構の西半部は調査区外となるため未調査。平面形は円形であり、上面の直径は約1.2m、土壌はほぼ垂直に掘り下げられており、底面の直径は約1.0m、深さは検出面より約2.0mを測る。なお、ここでは遺構底面より図6(平面図点線部分)や図版2に示すように、有機質の桶のものと思われる痕跡が観察された。ただし、それは遺構内の堆積土には全く反映していない。それはI章2項にも触れたように、調査地が西ノ京丘陵(表層地質が上部大阪層群=酸化土壌)にあるため、有機質(桶や骨等)が遺存しにくい条件にあるためと思われる。なおこのことは以下に述べる他の墓についても同様であり、ごく微量の臼歯が出土したもの(墓-19)以外は骨片等は一切出土していない。なお、墓壙内(おそらくは棺内)には土師皿2、および六道鏡を副葬していた。

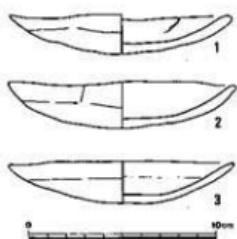
b 遺物

土器 (図7、図版2)

1~3は共に土師皿である。白色系の比較的精良な胎土を用いている。口径は12cm前後を測るもので、郡山城周辺の17世紀代の土師皿(中型品)としてはごく普遍的な形態を有するものである。なお、1、2については成形時の粘土の継ぎ目痕が観察される。

錢貨 (図8、図版2)

c 1~c 6は全て寛永通宝であり、また



全てがいわゆる「古寛永」(鋳造年代=1636年より1668年のいわゆる「文銭」登場まで)である。なお、ここで見られる銭貨については以下に報告する他の墓出土の近世墓と同様、いわゆる「六道銭」として埋納されたものであろう。

c 小結

本遺構の時期については、六道銭の組成ならびに土師皿の形態より考えて17世紀後葉と考えることができよう。

図7 墓-01出土土師皿実測図 (S : 1/3)

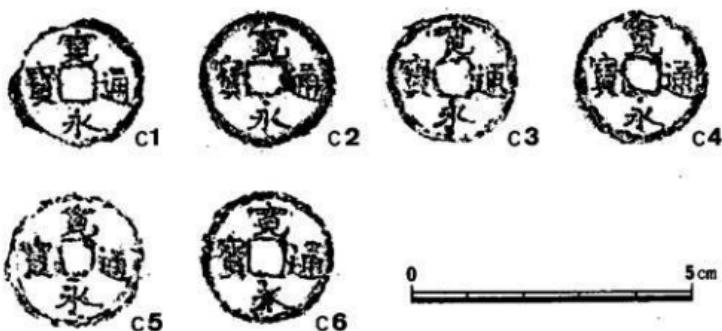


図8 墓-01出土銭貨拓影 (S : 1/1)

(2) 墓-02

a 遺構 (図9、図版3)

本遺構は瓦質土器壺を埋葬主体に用いた土器棺墓である。ここでは墓壙自体の掘り方を平面的に検出することができなかったが、土層の観察によって判断すれば、それは直径約70cm程度の円形のものになると思われる。なお、墓壙の深さは検出面より約40cmを測るが、棺としていた壺の破損状況より判断(図9断面図参照)すれば、実際(掘削当初)の深さはそれよりさらに数10cm上乗せした値となろう。

なお、ここでは既述のように棺として瓦質土器の壺を倒立した状態で使用していた。この場合、死者は墓壙内に安置された後、上から壺を被せたという埋葬状況が想定できる。なお、副葬品として棺内より土師皿1、土師器小型鉢1、および六道銭が出土した。

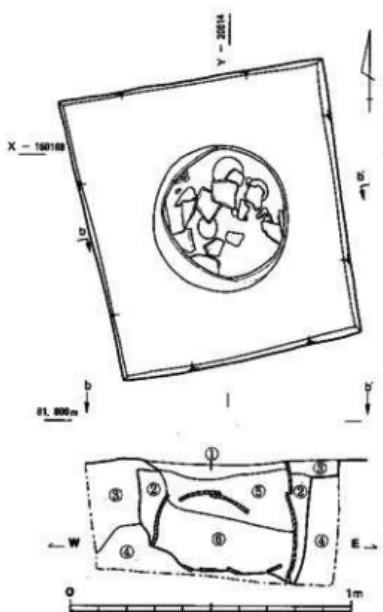


図8 墓-02平面図および土層断面図 (S : 1/20)
 ①灰(N6/0) 土層 ⑥黒縞(10YR3/1) 粘質土層
 ②橙(7.5YR7/6) 粘質土層 ④淡黄(5Y8/4) 粘質土層(地山)
 ③淡黄縞(10YR8/3) 粘質土層
 ⑤褐(10YR4/1) 粘質土層(淡黄シルトブロック含む)

図8 墓-02平面図および土層断面図 (S : 1/20)
 上の系譜関係、および胎土の特徴より見て、この土器は土師器よりむしろ瓦質土器の系譜に連なる
 製品であろうと思われる。ただし、現在のところ管見には類例を見ない資料である。なお、具体的
 な用途についても不明である。それについては、今後民俗例からの検討が必要とされるであろう。
 6は、土師皿である。白色系の精良な胎土を用いている。口径は10.2cmを測る。口径10cm前後のグ
 ループ（土師皿中型品）に含めてよかろう。

銭貨（図12、図版4）

破損した一例（c 12）を除くと、いざれもいわゆる「古寛永」である。六道錢として棺内に副葬
 されたものであろう。

c 小結

本遺構の時期については、六道錢の組成、ならびに土師皿の形態より考えて17世紀後葉と考えら
 れる。

b 遺物

瓦質土器（図10、図版3）

4は、倒立した状況で土器棺として使用され
 ていた瓦質土器甕である。口径54cm、器高は胴
 部下半の破片を欠くため正確には不明だが、想
 定約50cm前後となるものと思われる。口縁部上
 端には比較的幅広の面を有している。なお、内
 外面には炭素を吸着させているが、破断面は灰
 白色を呈しておらず、淡茶色となっている。す
 なわち、この土器は瓦質製品とはいえ、すでに
 土師質化の傾向が顕著である（もとよりこのこ
 とは、17世紀後半以降の大和産の瓦質土器の一
 般的な傾向である）。また、体部内面には炭化
 物が多い量に付着している（化学的には未分析。
 図版3）。

土師器（図11、図版3）

5は、土師器の小型鉢である。器体の一部に
 半円形の切り込みがみられる。器壁は比較的厚
 手でぼってりとした印象を受けるが、成形は手
 づくねによるものではなく、輪積みによるもの
 である。こうした技法上の特徴、ならびに形態

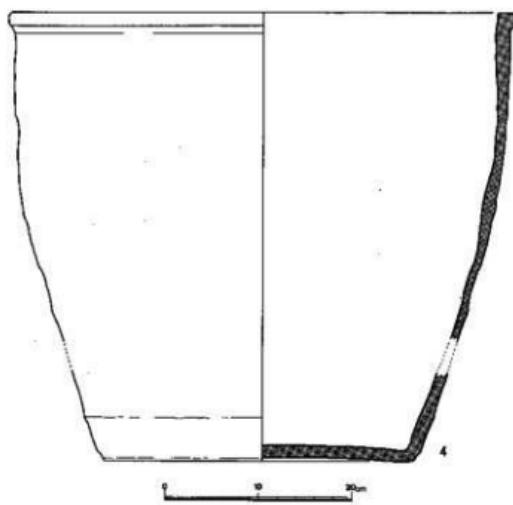


図10 墓-02土器棺(瓦質土器)実測図(S:1/6)

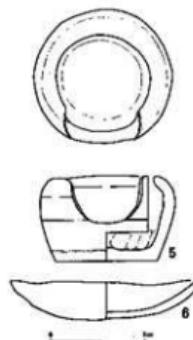


図11 墓-02 出土土師器実測図(S:1/3)

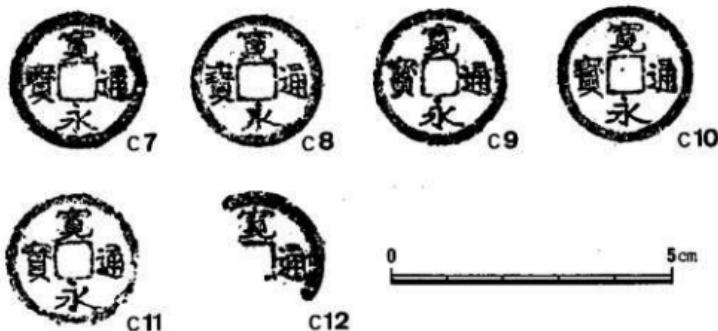


図12 墓-02出土銭貨拓影(S:1/1)

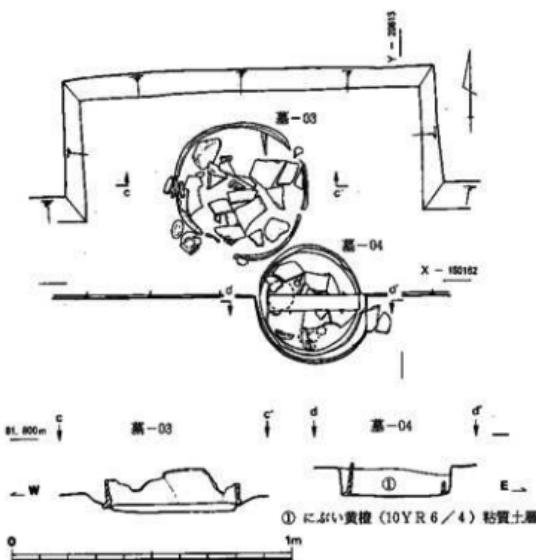


図13 墓-03・04平面図および土層断面図 (S : 1/20)

(3) 墓-03

a 遺構 (図13、図版4)

墓-03については、後述の墓-04とほぼ接して検出された遺構であり、埋葬主体に瓦質土器甕を用いる土器棺墓である。ただし、両者共に遺構の上～中半部が削平されており、その切り合い関係は確認することができなかった。墓壇についてもほぼ下端部のみの検出に過ぎないため、規模等の詳細は明らかではない。ただし、その底面の直径は約50cmを測る。副葬品としては中国製染付磁器、肥前磁器、土鉢、および寛永通宝がある。

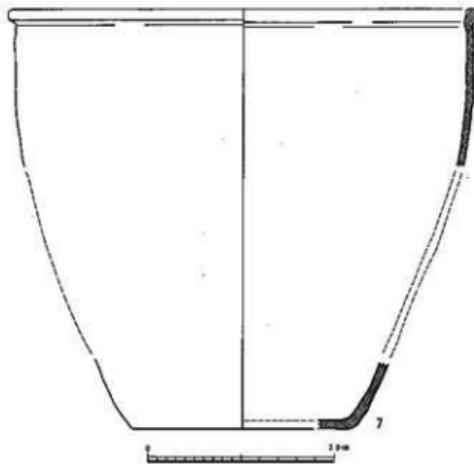


図14 墓-03土器棺 (瓦質土器甕) 実測図 (S : 1/6)

b 遺物

瓦質土器（図14、図版4）

7は、土器棺として使用されている瓦質土器壺である。口径50.5cmを測り、今回出土した他の瓦質土器壺（土器棺）に比して、10数cm口径が大きいのが特徴である。器高については、胴部の破片を欠くため判然としないが、おおむね45cm前後に復元できるだろう。調整上の特徴としては、体部内面にヨコナデを施すものの、指頭圧痕が顕著に認められる点、および底部外表面が未調整という点があげられる。なお、焼成は完全に瓦質であり、土師質化は認められない。

磁器および土製品（図15、16、図版4、5）

8は、中国製（明末～清初）の染付磁器碗である。高台部外面に細かい綫の刻目状の調整痕を持つのが特徴。やや端反りの器形であり、器表面はきわめて滑らかである。底部内面に花卉文を有する。なお、底部外表面には「大明成化年製」の銘を持つ。

9は、肥前磁器染付碗である。器表面にはピンホールが若干見られる。外面に松枝等の風景を描き、内面については素文である。

10は、肥前磁器染付鳥形合子蓋である。成形は型打ちによるもので、後に細かい筆によって羽、目、嘴等を描いている。恐らく鶴を形象したものであろう。なお、内面についても総釉である。

11は、肥前磁器鳥形合子身であり、10とセットとなるものである。成形はやはり型打ちによるものであろう。内面および外面体部上半に粗く施釉する。なお、蓋と異なり全くの素文である。

12は、肥前磁器小坏（白磁）である。成形はややいびつで、恐らく手づくねによるものであろう。内面総釉。外面は釉を流し掛けにする（高台内無釉）。

13は、土師質の土鉢である。恐らく外型を用いて鉢部分を成形した後、内玉を入れ、後に把手部を附加して焼成されたものであろう。非常に緻密な胎土を用いて堅緻に焼成されている。試みに軽く振ると、現在でも乾いた美しい音色をたてる。

錢貨（図17、図版5）

c 13は、寛永通宝（古寛永）である。これについては、本来は6枚セットであったものが、他の5枚については攪乱によって散逸したものと思われる。

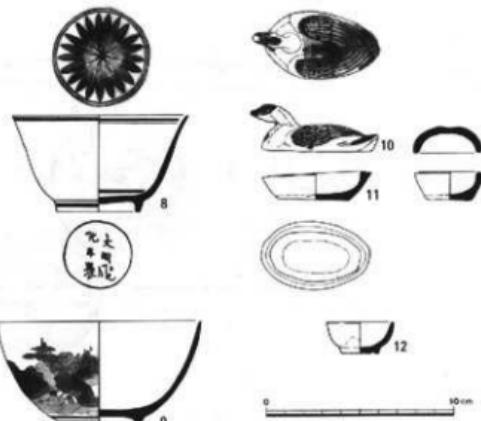


図15 墓-03出土磁器実測図 (S : 1/3)

c 小結

本造構については、出土遺物の組成より考えて、17世紀中葉～後葉のものと思われる。

(4) 墓-04

a 造構（図13、図版5）

本造構は、先述の墓-03に隣接して検出されたもので、それと同様に造構の中～上半部を削平されている。したがって規模等については明確にできないが、墓壇底面の直径は約39cmを測る。なお、埋葬主体には瓦質土器甕を倒立して用いている。副葬品として土師皿1と六道銭が出土した。

b 遺物

瓦質土器甕（図18、図版5）

14は、土器甕として使用されていた瓦質土器甕である。口径は38.0cmを測る。内面の調整についてはヨコナデを基本とするが、粘土帯の継ぎ目には指頭圧痕が多く残っている。なお、底部外面について未調整である。焼成は完全な瓦質であり、土師質化の傾向は見られない。

土師皿（図19、図版5）

15は、口径9.2cmの中型の土師皿である。やや粗雑な成形がなされており、口縁は波状となる。なお、これには口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと推定される。

錢貨（図20、図版5）

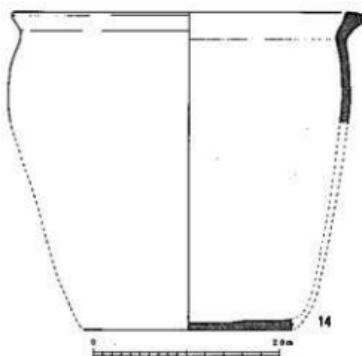


図18 墓-04土器甕(瓦質土器甕)実測図(S:1/6)

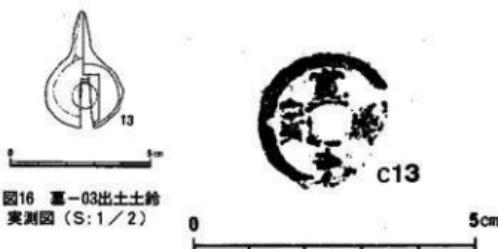


図16 墓-03出土土器
実測図(S:1/2)



図17 墓-03出土錢貨拓影(S:1/1)

c 14～c 19は寛永通宝であり、いずれもいわゆる「古寛永」である。このうちc 16は「寛」字部分を欠失する。六道銭として副葬されたものであろう。

c 小結

本造構の時期については、六道銭の組成等より墓-03と同様、やはり17世紀中葉～後葉と考えられる。



図19 墓-04出土土師皿実測図(S:1/3)

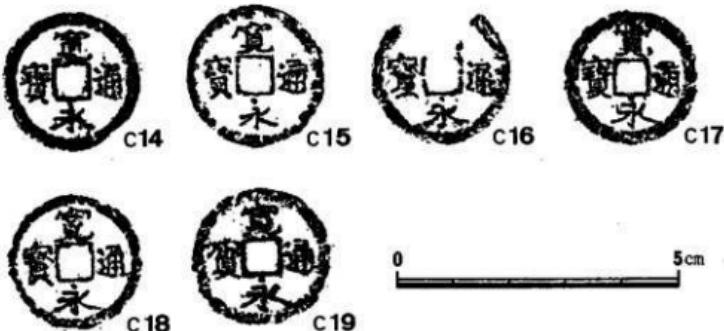


図20 墓-04出土銭貨拓影 (S:1/1)

(5) 墓-05

a 造構 (図21、図版6)

本造構は、埋葬主体には瓦質土器甕を正立して用いる土器棺墓である。ここでは北半部分を上層造構によって破壊されているほか、上半部分についても削平を受けている。よって遺存状況は良好ではないが、現状では墓壙の直径約46cm、深さは約16cmを測る。なお、副葬品として土師皿3、および六道錢が見られた。また、漆器も副葬されていたようで、漆の一部が残存していたが、前述の如く調査地の土壤が酸化土壤であるため木質は全く遺存しておらず、器形等については不明である。

b 遺物

瓦質土器 (図22、図版6)

16は、瓦質土器甕である。土器棺墓として使用されていた。体部上半以上を欠失する。なお、内面には粘土帶の継ぎ目に指頭圧痕が多く残している。また、焼成はやや甘く、土師質化の傾向が若干見られる。

土師皿 (図23、図版6)

17~19は土師皿である。口径はいずれも10cm前後で、中型品である。なお、いずれも灯明皿として使用された痕跡はない。

銭貨 (図24、図版6)

c 20は元豐通宝（北宋、初鑄1078年）であり、今回の調査で出土した渡来銭としては唯一例となる。c 21~c 24は寛永通宝（いわゆる「古寛永」）である。また、c

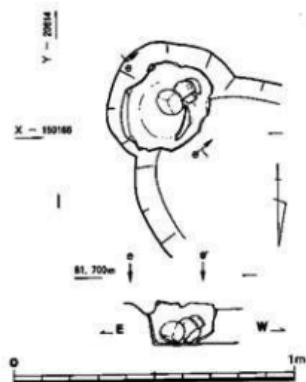


図21 墓-05 平面図および断面図 (S:1/20)



図22 墓-05土器棺(瓦質土器)実測図(S:1/6)

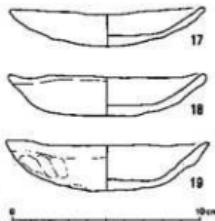


図23 墓-05出土土器皿実測図(S:1/3)

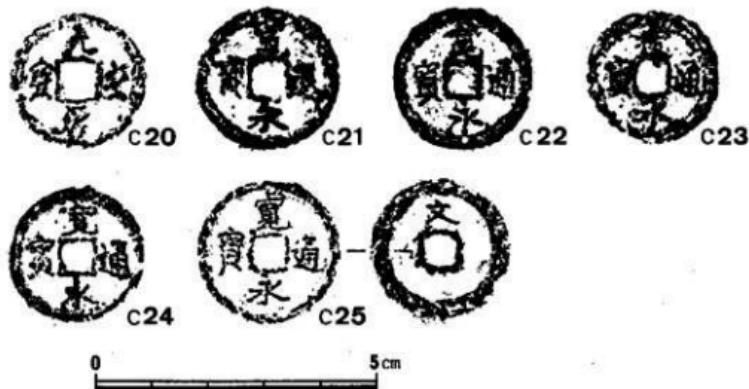


図24 墓-05出土銭拓影(S:1/1)

25は背面に「文」字を配した、いわゆる「文銭」(鋳造年代1668年~1696年)である。これらの銭貨については、六道銭として埋納されたものであろう。

c 小結

本遺構の時期については、六道銭の組成等より考えて17世紀後葉と考えられる。

(6) 墓-06

a 遺構(図版7)

墓壙の平面形は長円形を呈し、長径約92cm、短径約80cmを測る。なお、深さは検出面より約130cmである。埋葬主体については全く遺存していないが、恐らく墓-01において痕跡の見られた結構が用いられていたものと思われる。副葬品としては土師皿3と寛永通宝が見られた。

b 遺物

土師皿（図26、図版7）

20～22は、いずれも口径約10cmの中型の土師皿である。白色系の精良な胎土を使用している。なお、灯明皿として使用されたものはない。

錢貨（図27、図版7）

c26、c27はいずれも寛永通宝である。ただし、前者はいわゆる「古寛永」、後者はいわゆる

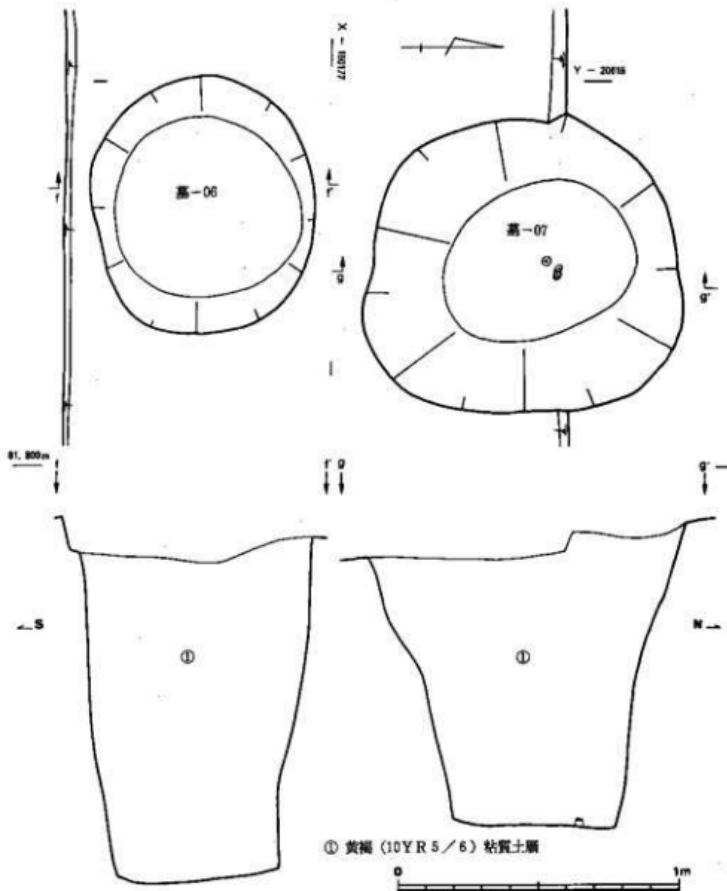


図26 壱-06・07平面図および土層断面図 (S:1/20)

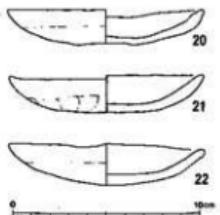


図26 墓-06出土土師皿実測図 (S:1/3)

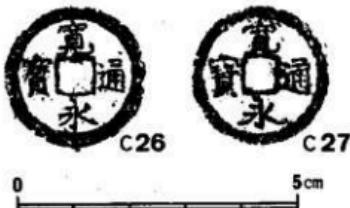


図27 墓-06出土錢貨拓影 (S:1/1)

「新寛永」(铸造年代1697年)である。なお、ここでは造構の深さより考えて錢貨が散逸した可能性ではなく、副葬された枚数自体が当初より2枚であったものと考えられる。

c 小結

本造構の時期については、出土した土師皿、および錢貨より考えて17世紀末葉～18世紀前葉と考えられる。

(7) 墓-07

a 遺構 (図25、図版8)

墓壙の平面形は不整円形である。上面の直径は約110cm、深さは約110cmを測る。なお、底面の直径は約60cmを測り、墓壙の壁は上半に比し下半がややすぼまる形で掘削されている。埋葬主体については不明だが、おそらく墓-01同様に結構が使用されていたものと思われる。なお、副葬品としては寛永通宝7枚がある。

b 遺物

錢貨 (図28、図版8)

c 28～c 34は、いずれも寛永通宝である。このうちc 28のみがいわゆる「古寛永」であり、他のものはいわゆる「新寛永」である。なお、ここでは以上の7枚の錢貨が副葬されていたが、他の造構からの混入は考えられない。

c 小結

本造構の時期については、出土錢貨の組成より考えて17世紀末葉～18世紀前葉と考えることができよう。

(8) 墓-08

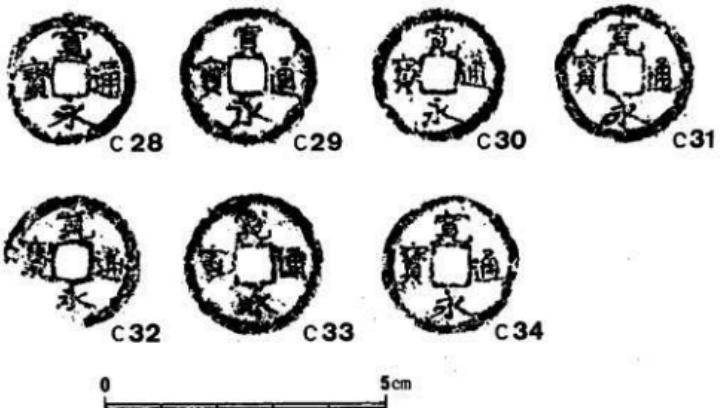


図28 墓-07出土銭貨拓影 (S:1/1)

a 遺構 (図29、図版9)

本遺構は一部上層遺構によって破壊されている。平面形はほぼ円形を呈するもので、上端の直径約90cm下端の直径約70cm、深さは約75cmを測る。埋葬主体については遺存していないが、おそらく墓-01と同様、結構を使用したものであったと思われる。なお、副葬品には土師皿5、および六道錢がある。

b 遺物

土師皿 (図30、図版9、10)

23~27は、すべて土師皿である。口径は11~12cmを測り、ほぼ中型品の範疇に属するものである。いずれも白色系の比較的密な胎土を用いている。なお、灯明皿として使用されたものはない。

土鉢 (図31、図版10)

28は、土師質の土鉢である。一部欠損しており、先述の13 (図16) のような把手が本来付くものかどうかは不明。鉢部の直径は1.6cmと、13に比してやや小径である。

銭貨 (図32、図版10)

c 35~c 40はいずれも寛永通宝である。このうちc 35のみがいわゆる「古寛永」で、他のものについてはいわゆる「新寛永」である。なお、c 40については上半部を欠失している。これらの銭貨は六道錢として副葬されたものであろう。

c 小結

本遺構の時期については、土師皿の形態、ならびに六道錢の組成より考えて17世紀末葉~18世紀初頭と考えられる。

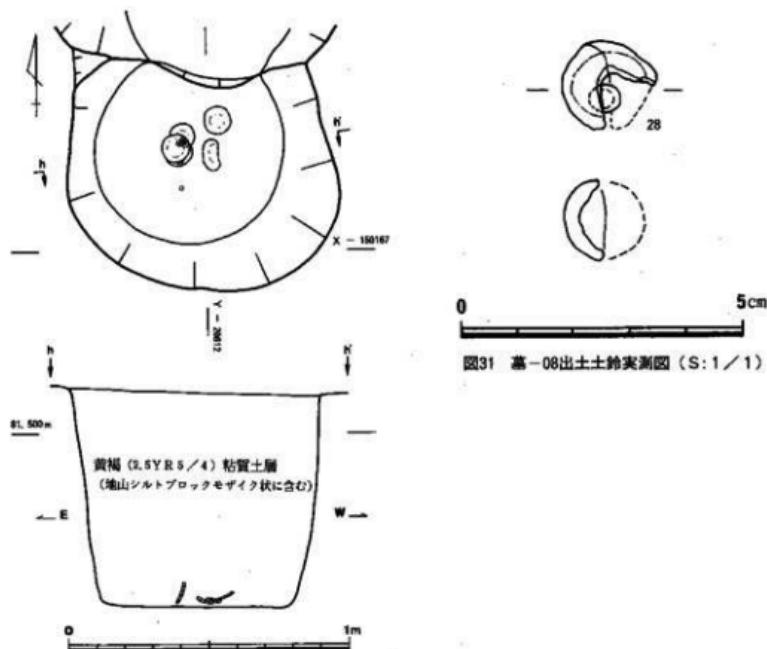


図29 墓-08平面図および土層断面図 (S:1/20)

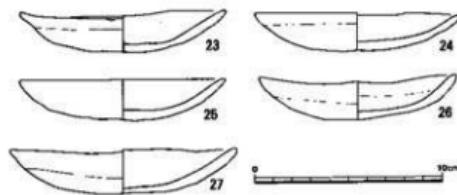


図30 墓-08出土土器皿実測図 (S:1/3)

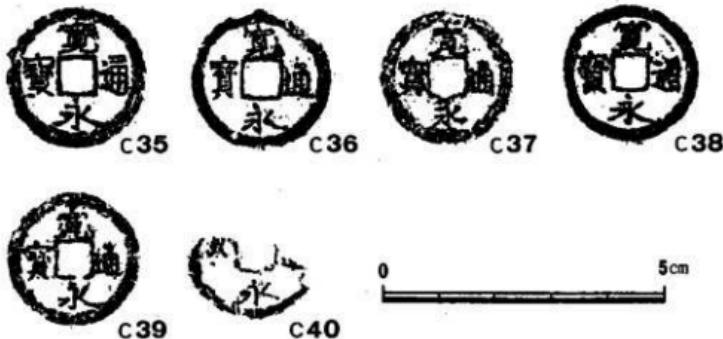


図32 墓-08出土銭貨拓影 (S:1/1)

(9) 墓-09

a 造構 (図33、図版11)

墓壙の平面形は隅丸方形状であり、その一辺は約45cmを測る。また、深さは検出面より約10cmを測る。埋葬主体については明らかではないが、おそらく有機質の容器が使用されていたものと思われる。なお、副葬品として土師皿と六道錢が出土した。

b 遺物

土師皿 (図34、図版11)

29は、口径約11cmの土師皿（中型品）である。白色系の比較的精緻な胎土を用いている。なお、灯明皿と図34 墓-09出土土師皿実測図 (S:1/3)
して利用された痕跡はない。

銭貨 (図35、図版11)

c 41～c 46は、すべて寛永通宝である。このうちc 41およびc 42がいわゆる「古寛永」、c 46がいわゆる「文錢」、残るc 43～c 45がいわゆる「新寛永」である。つまり、ここではこれら3者の混在が認められる。六道錢として副葬されたものであろう。

c 小結

本造構の時期については、六道錢の組成より考えて17世紀末葉～18世紀前葉と考えられる。

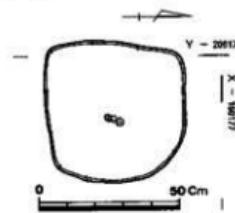


図33 墓-09平面図 (S:1/20)

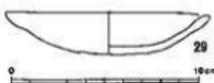


図34 墓-09出土土師皿実測図 (S:1/3)

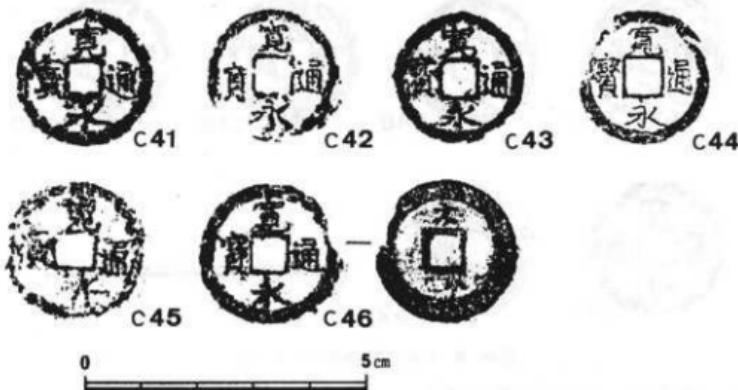


図35 墓-09出土銭貨拓影 (S:1/1)

(10) 墓-10

a 遺構 (図36、図版12)

墓壙の平面形はほぼ円形であり、その直径は約70cmを測る。また、深さは検出面より約22cmを測る。埋葬主体については明らかではないが、おそらくは結桶等の有機物の容器が使用されていたものと思われる。なお、副葬品としては土師皿2、肥前磁器1、および六道錢がある。

b 遺物

土師皿および肥前磁器 (図37、図版12)

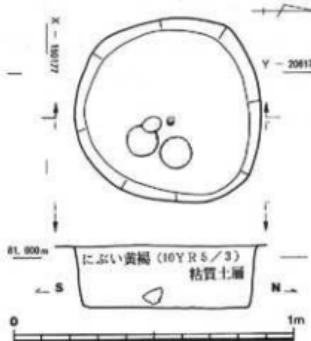


図36 墓-10平面図および土層断面図 (S:1/20)

30、31は土師皿である。口径はいずれも11cm弱であり、土師皿中型品の範疇に属するものである。白色系の精良な胎土を用いている。なお、灯明皿として使用されたものはない。

32は肥前磁器染付小壺である。外面に草花文および松垣文を描き、対称位置には蝶文を描く。薄手の精巧

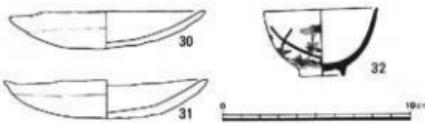


図37 墓-10出土土師皿・磁器実測図 (S:1/3)

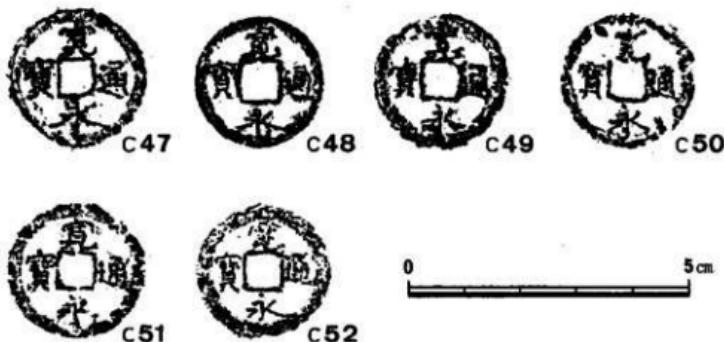


図38 墓-10出土錢貨拓影 (S:1/1)

な作りが特徴的な、伊万里焼の優品である。

なお、高台墨付には難れ砂が付着している。17世紀後半代のものであろう。

銭貨（図38、図版12）

c47～c52は、いずれも寛永通宝である。このうちc47のみがいわゆる「古寛永」、他は全ていわゆる「新寛永」である。これらの銭貨は六道銭として副葬されたものと思われる。

c 小結

本造構の時期については、出土遺物の組成より考えて17世紀末葉～18世紀初頭と考えられる。

(11) 墓-11

a 造構（図39、図版13）

墓壙の平面形はほぼ正方形であり、上面の一辺長約150cm、深さは検出面より約150cm、墓壙下面の一辺長は約80cmを測る。埋葬主体については遺存していないため全く不明であるが、方形の掘り方より考えて、それはやはり方形の有機質の容器（箱状の木棺一ただし座棺）が使用されていたものと推定されよう。ただこの場合、遺構内より釘等が全く出土していない点は疑問として残る。なお、副葬品として土師皿および寛永通宝18枚が出土した。

b 遺物

土師皿（図40、図版13）

33は土師皿である。口径は11cm弱で、ほぼ土師皿中型品の範疇に属するものである。白色系の精良な胎土を用いている。なお口縁部には粘土の繊目が見られる。いずれも灯明皿として使用された痕跡はない。

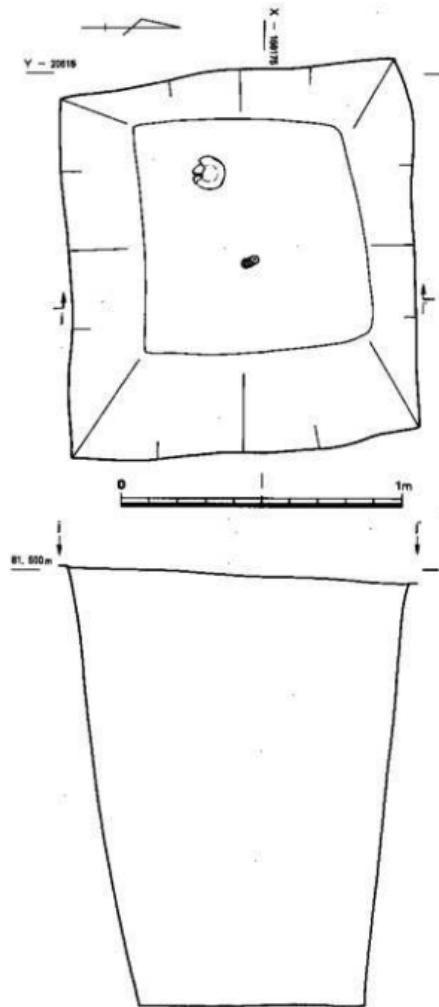


図39 墓-11平面図および断面図 (S:1/20)

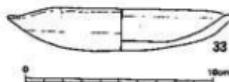


図40 墓-11出土土師皿実測図 (S:1/3)

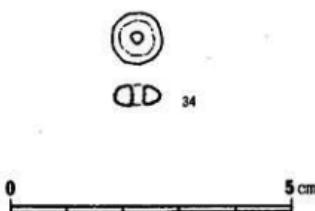


図41 墓-11出土木製数珠玉実測図
(S:1/1)

数珠玉 (図41、図版13)

34は、木製の数珠玉である。ここで出土したのはこの一点のみで、これについてはたまたま周辺を灰層が被覆していたため遺存したものと思われる。直径45mm、穿孔の直径0.8mmを測る。

銭貨 (図42、43、図版14)

c 53～c 70はいずれも寛永通宝である。これら18枚は全て本造構より出土したものなので、6枚を1セットと考えると、ここでは3セット分の六道銭が見られることになる。ただしこれらは分散せず、1個所にまとまって出土した。なお、c 53～c 55がいわゆる「古寛永」、c 56～c 64がいわゆる「文銭」c 65～c 70がいわゆる「新寛永」である。

c 小結

本造構の時期については、主として寛永通宝の組成より考えて、17世紀末葉～



C53



C54



C55



C56



-



C57



C58



-



C59



C60



-



C61



C62



-



C63



C64



図42 墓-11出土銭貨拓影1 (古宽永および文銭 S:1/1)

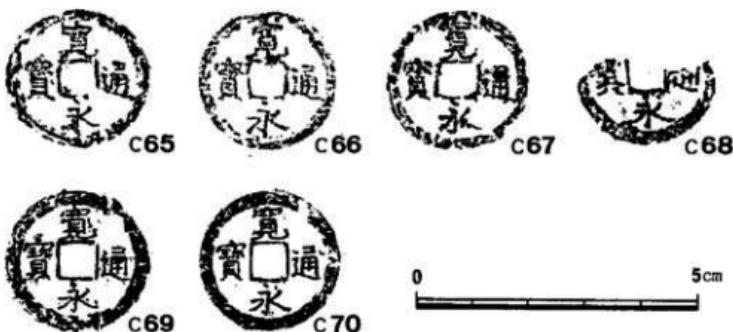


図43 墓-11出土銭貨拓影2(新寛永 S:1/1)

18世紀初頭と思われる。なお、六道銭が3セット見られたこと、および墓壙が他のものに比して大きいことなどより、ここでは3名を同時に埋葬した可能性もある。

(12) 墓-12

a 造構(図44、図版14)

墓壙の平面形はほぼ円形をなし、その上面径は約90cmを測る。また、深さは検出面より約150cm、下面径は約65cmを測る。副葬品としては十師皿3の他、太刀が一振出土した。太刀は、切先を墓壙底にはば接し、墓壙西側壁に立てかけるような状態で検出された。埋葬主体は遺存していないため不明であるが、かりにこれを墓-01でその痕跡が見られたような結論とすると、太刀は棺の外側に、それに添えるような形で立て置かれたという状況が復元できる。なお、ここでは六道銭は出土していない。

b 遺物

土師皿(図45、図版14)

35~37は、土師皿である。口径はいずれも7cm弱と、土師皿小型品の範疇に属するものである。なお、今回検出された近世墓では本造構の他に土師皿小型品を副葬した例はないが、この土師皿小型品は白色系の精良な胎土で製作されており、この点、および調整技法等は、他の墓で出土している土師皿中型品と全く差異はない。ただ、これらにはいずれも口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されたものと思われ、この点については他の墓に副葬された土師皿のあり方と比較して、やや特異である(今回他の墓から出土した土師皿のうち、灯明皿として使用されたことが明らかなものは、墓-04出土の一例のみである)。

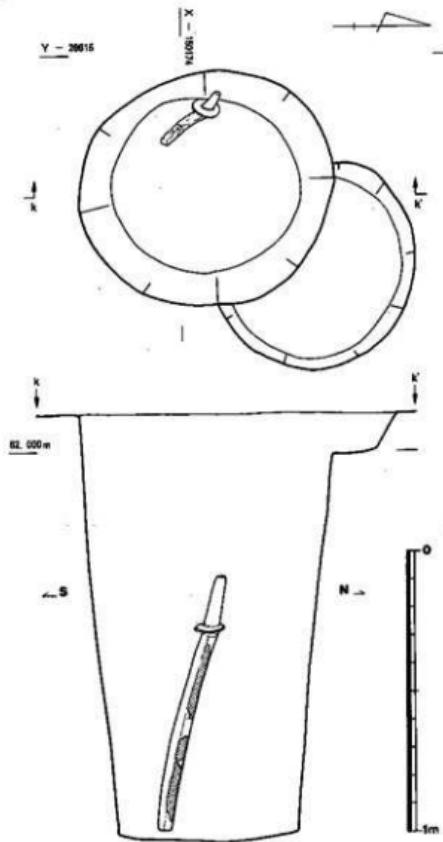


図44 墓-12平面図および断面図 (S:1/20)

部については、長さ72.4cm、最大幅4.3cmを測る（柄と合計した総長は93.1cm）。鞘は遺存していない。なお、鞘の木質の遺存状況が悪く、刀身の一部が露出しているほか、木質に置換する形で土が大量に付着している。鞘は黒漆塗であったようで、漆膜が遺存している。ただし、既述のように木質自体の遺存状況が劣悪なため、それは刀身に付着した土に貼り付くという、脆弱な形でかろうじて遺存しているものである。また、そのような状況のため巻形ないし返角は遺存していない。

c 小結

本遺構において特記されるのは、いうまでもなく太刀の出土であろう。管見では、今回の調査の他に近世墓より太刀が出土した事例は、大坂城三之丸出土例⁽¹⁾、および瑞鳳殿伊達政宗墓出土例⁽²⁾のわ

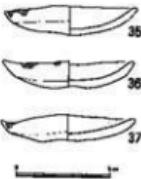


図45 墓-12出土土師皿実測図 (S:1/3)

太刀 (図46、図版15)

今回本遺構より出土した太刀（38）について、現在クリーニングおよび保存処理（委託）中であり、X線写真も未撮影である。したがってここでは実測図作成時のごく粗い観察所見を記すに止め、その詳細な報告については後日別稿にて行いたい。なお、太刀は柄部と刀身部が折損によって分離している。

柄部については、鍔も含めた長さ20.7cm、幅は最大5.1cmを測る。なお、鍔の直径（長径）は10.6cmである。柄の下地は部分的な観察では絞皮巻が見られ、柄巻（菱巻）も部分的に観察できる。なお、

頭については現時点では詳細不明。刀身

部については、長さ72.4cm、最大幅4.3cmを測る（柄と合計した総長は93.1cm）。鞘は遺存していない。なお、鞘の木質の遺存状況が悪く、刀身の一部が露出しているほか、木質に置換する形で土が大量に付着している。鞘は黒漆塗であったようで、漆膜が遺存している。ただし、既述のように木質自体の遺存状況が劣悪なため、それは刀身に付着した土に貼り付くという、脆弱な形でかろうじて遺存しているものである。また、そのような状況のため巻形ないし返角は遺存していない。

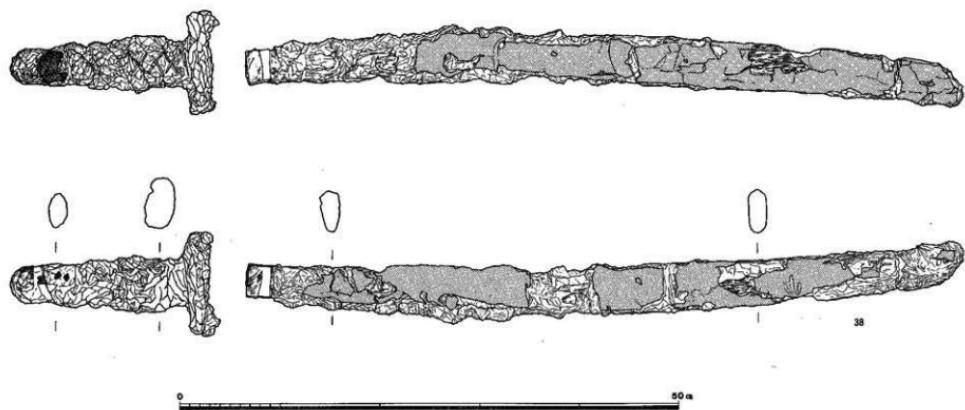


図46 墓-12出土太刀実測図 (S:1/4 トーン部分は塗被装)

ずか2例を挙げうるに止まる。また、本遺構では土師皿小型品（全て灯明皿）の出土や、錢貨が全く副葬されていないなど、ここで見られた他の墓とは明らかに様相が異なる点がいくつか指摘できる。こうした点は、いずれ近世期における太刀の墓への副葬という現象を考えてゆく際の、重要なポイントとなるのではないだろうか。今後の調査事例の増加を待ちたい。

なお、本遺構の時期については、錢貨等の具体的な資料を欠くため明確にはし難いが、出土した土師皿の形態、ないしは今回検出した他の墓の時期より考えて、17世紀後葉～18世紀初頭の時期幅に収まるものとしてよからう。

(13) 墓-13

a 遺構（図47、図版15）

本遺構の埋葬主体は、瓦質土器甕を倒立したものである。なお、甕は体部以下を削平によって失っている。また、墓壇の掘り方については平面、あるいは土層によって確認することはできなかった。

b 遺物

瓦質土器甕（図48、図版15）

39は、土器棺として使用されていた瓦質土器甕である。体部下半以下を欠失している。口径44.6cm。口縁直下外面に櫛描（7条）の波状文を持つ。焼成は瓦質であり、土師質化の傾向は見られない。

c 小結

本遺構については、瓦質土器甕以外に時期を決める手がかりを欠く。したがってその編年を確立していない現状では、確定的な時期を押さえることは困難だが、郡山城下の他の地点出土の資料より考えて、おむねそれは17世紀中～後葉と考えることができるであろう。

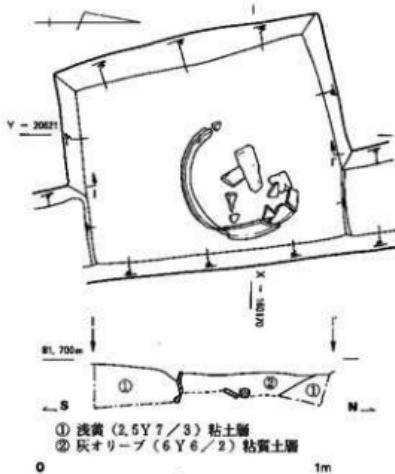


図47 墓-13平面図および土層断面図 (S:1/20)

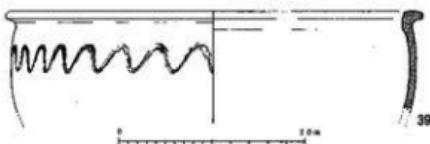


図48 墓-13土器棺（瓦質土器甕）実測図 (S:1/6)

(14) 墓-14

a 遺構（図49、図版15）

本遺構は、埋葬主体として、比較的小型の瓦質土器甕を正立の状態で使用している。なお、墓壇の掘り方に関しては、平面的、あるいは土層の観察では明確にできなかった。また、甕

の蓋については、有機物（木蓋か？）であったものと思われ、ここでは遺存していない。副葬品は見られなかった。

b 遺物

瓦質土器（図50、図版15）

40は、土器館として使用されていた瓦質土器壺である。口径31.2cm、器高23.3cmを測るもので、同種のものとしては最も小型の部類に属するものである。口縁部直下外面に、先端の丸い棒状工具による波状文が施されている。また、外面体部下半の底部付近に、ヘラ刻線による窓記号を有する。なお、体部内面には粘土帶緋目に指頭圧痕が多く残している。また、焼成については完全な瓦質である。

c 小結

本遺構の特色は、埋葬主体となる壺を正立の状態で使用している点である。今回の墓の調査事例のうち、埋葬主体に瓦質土器壺を使用したものについては、本遺構および墓-05を除くと、全てそれを倒立の状態で使用していたのが特徴で、本例はそのなかにあっては特殊な事例である。このことについては、壺自体が小型であったということも勘案すれば、本遺構の被埋葬者が、おそらくは生後間もない小児であったことを示すものであろう。

なお、本遺構の時期については、錢貨等の決め手を欠くものの、瓦質土器壺の形態、焼成等より考えて、それはおおむね17世紀中葉～後葉と考えられる。

(15) 墓-15

a 遺構（図51、図版16）

本遺構については、その南半を新しい時期の遺構（井戸）によって破壊されている。したがって平面図等によても明らかなように、墓壙の形態、規模について明確にすることは困難である。なお、埋葬主体としては、瓦質土器壺を倒立した状態で用いている。また、副葬品は出土していない。

b 遺物

瓦質土器（図52、図版16）

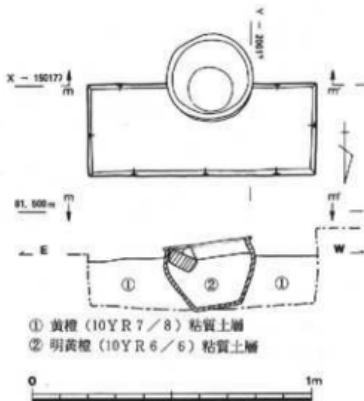


図49 墓-14平面図および土層断面図 (S: 1/20)

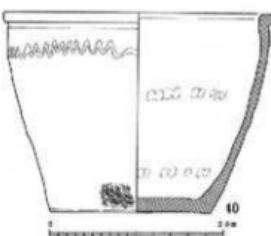


図50 墓-14土器壺(瓦質土器壺)実測図 (S: 1/6)

生後間もない小児であったことを示すものであろう。

41は、土器棺として使用されていた瓦質土器壺である。復元口径36.2cmを測るもので、体部下半以下は欠失している。口縁部外面直下に、棒状工具の先端による波状文を施す。なお、焼成は土師質化の傾向が顕著である。また、胎土はチャート、長石等の鉱物粒を多量に含む粗いものが用いられており、全体として大和型の瓦質土器壺の精緻なイメージからはやや隔絶した印象を受ける個体である。おそらく、同器種の最終的な様相を示すものであろう。

c 小結

本遺構の時期については、錢貨等の具体的な決め手に欠けるものの、退化傾向にある瓦質土器の様相より考えて、それはおむね17世紀末葉～18世紀前葉と考えることができよう。

(16) 墓-16

a 遺構（図51、図版16）

本遺構については、隣接して存在した墓-15と同じく、その南半部を後世の井戸によって破壊されている。よって墓壙の形態、規模等は明瞭ではない。埋葬主体としては、瓦質土器壺を倒立した状態で使用していた。なお、副葬品は出土していない。

b 遺物

瓦質土器（図53、図版16）

42は、土器棺として使用されていた瓦質土器壺である。体部下半以下を欠失するもので、復元口径は37.0cmを測る。なお、施文は見られない。焼成は土師質化が顕著であり、胎土はチャートや石英等の鉱物粒を多く含む、比較的粗いものが用いられている。先の41と同様、大和型の瓦質土器壺の最終的な様相を示す個体であろう。

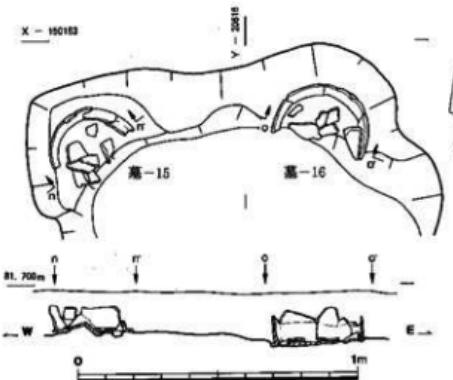


図51 墓-15・16平面図および断面図 (S:1/20)

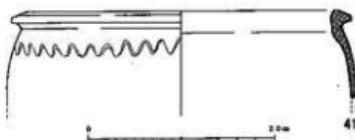


図52 墓-15土器棺(瓦質土器壺)実測図 (S:1/6)



図53 墓-16土器棺(瓦質土器壺)実測図 (S:1/6)

c 小結

本遺構の時期は、墓-15と同様、17世紀末葉～18世紀前葉として考えることができよう。

(17) 墓-17

a 遺構 (図54、図版16)

本遺構は、直径約45cmを測るほぼ円形の墓壙に、瓦質土器甕を埋葬主体として、それを倒立の状態で据え置いたものである。遺構はその大半が削平されており、墓壙の下端部が辛うじて遺存しているに過ぎない（深さ＝検出面より約6cm）。なお、土層断面図（図54下）における③層は、偶然本遺構と重複して検出された弥生時代（詳細な時期は不明）のピットのものである。また、副葬品については、全く検出されていない。

b 遺物

瓦質土器（図55、図版16）

43は、土器棺として使用されていた瓦質土器甕である。体部以下を欠失しており、全体の形状をうかがうことはできないが、口縁部の外傾状況が、他の資料に比して曲線的で緩いのが特徴である。復元口径は38.0cmを測る。なお、焼成は完全に瓦質で、土師質化の傾向は見られない。

c 小結

本遺構の時期については、錢貨等の具体的な決め手を欠くものの、瓦質土器甕の形態より考えて、それをおおむね17世紀中葉～後葉として考えることができよう。

(18) 墓-18

a 遺構 (図56、図版17)

本遺構は、直径約40cmを測るほぼ円形の墓壙に、瓦質土器甕を倒立の状態で据え置いたものである。

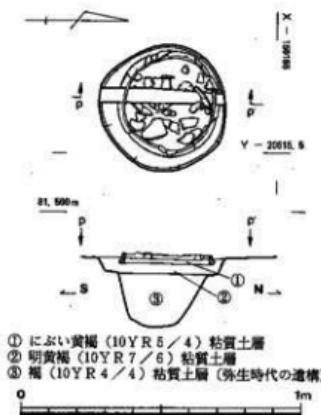


図54 墓-17平面図および土層断面図 (S:1/20)



図55 墓-17土器棺(瓦質甕)実測図 (S:1/6)



図56 墓-18平面図および土層断面図 (S:1/20)



図57 墓-18土器棺(瓦質土器甕)実測図 (S:1/6)

遺構の大半は削平されており、深さは最深部においても、検出面よりわずか6cmである。なお、副葬品は出土していない。

b 遺物

瓦質土器（図57、図版17）

44は、土器棺として使用されていた瓦質土器甕である。体部下半以下は欠失。口縁部直下に6条の櫛描波状文を描いている。なお、口径は34.0cmを測る。また、焼成は完全な瓦質であり、土師質化の傾向は見られない。

c 小結

本遺構の時期については、錢貨等の具体的な資料を欠くものの、瓦質土器甕の形態より考えて、それはおおむね17世紀中葉～後葉として考えられよう。

(19) 墓-19

a 遺構（図58、図版17）

本遺構は、基壇の平面形が不整形のものである。ただし、今回検出された墓には、基壇の平面形がこのようになるものは他に見当らないので、これについては他の重複する遺構が存在したものかもしれない。遺構は大半が削平されているようで、その深さは検出面より10cmに過ぎない。なお、埋葬主体については全く遺存していなかった。副葬品としては、寛永通宝5枚がある。また、ここでは成人のものと思われる臼歯一枚がある。

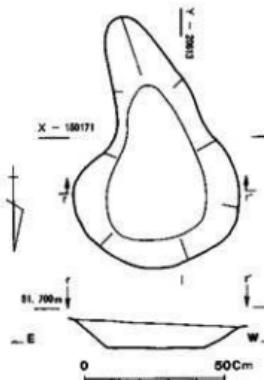


図58 墓-19平面図および断面図 (S:1/20)

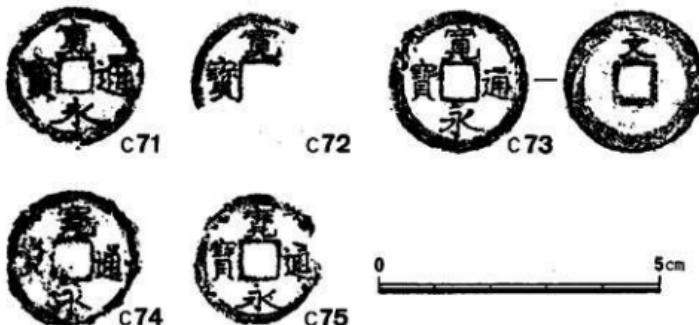


図59 墓-19出土銭貨拓影 (S:1/1)

が3点出土した（いずれも歯冠部の一部のみ。形質その他については未鑑定）。

b 遺物

銭貨（図59、図版17）

c 71～c 75は、すべて寛永通宝である。このうちc 71、c 72がいわゆる「古寛永」、c 73がいわゆる「文錢」、c 74、c 75がいわゆる「新寛永」である。これらの銭貨は六道錢として副葬されたものと思われるが、ここでは削平のためかセットのうちの1枚が不足している。

c 小結

本遺構の時期については、六道錢の組成より考えて、17世紀末～18世紀初頭と考えられる。

(20) 墓-20

a 遺構（図60、図版17）

本遺構は、墓壙の平面形が長円形となるものであり、その規模は長径約84cm、短径約68cm、深さは検出面より約44cmを測るものである。なお、墓壙下面の長径は約68cmである。また、副葬品としては六道錢が出土している。

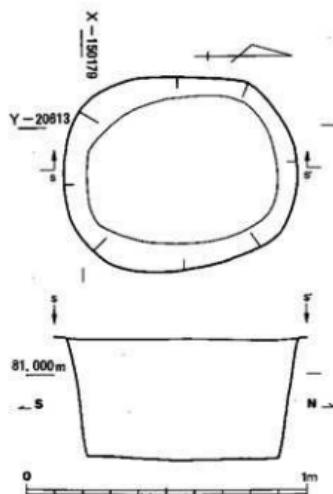


図60 墓-20平面図および断面図 (S:1/20)



図61 墓-20出土銭貨拓影 (S:1/1)

b 遺物

銭貨(図61、図版17)

c 76～c 80は、すべて寛永通宝である。このうちc 76がいわゆる「古寛永」、他はいわゆる「新寛永」である。これらの銭貨は六道錢として副葬されたものと思われるが、ここではセットのうち1枚が欠落している。

c 小結

本遺構の時期については、六道錢の組成より考えて、17世紀末葉～18世紀前葉と考えられる。

(21) 墓-21

a 遺構(図62、図版18)

本遺構は、基壇の平面形が隅丸方形となるものである。1辺の長さは約80cm、深さは検出面より約60cmを測る。なお、基壇下面の長径は約60cm。副葬品としては、寛永通宝6枚がある。

b 遺物

銭貨(図63、図版18)

c 81～c 86は、すべて寛永通宝である。このうち、c 81およびc 82がいわゆる「文銭」、他はいわゆる「新寛永」である。これらの銭貨については、六道錢として副葬されたものと思わ

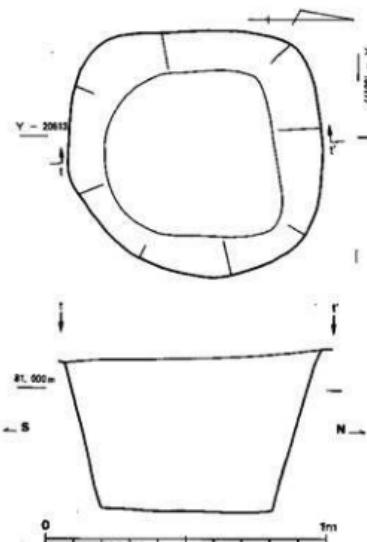


図62 墓-21平面図および断面図(S:1/20)

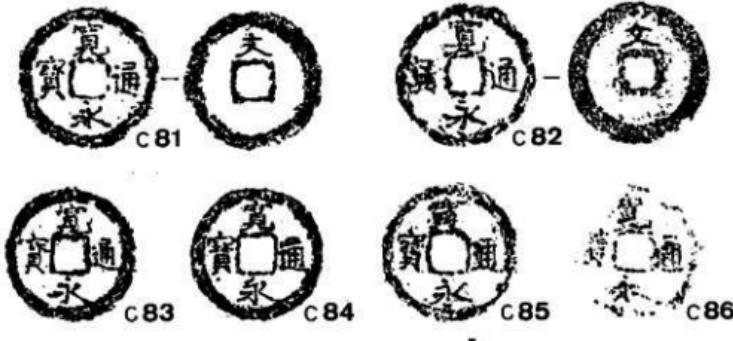


図63 墓-21出土銭貨拓影(S:1/1)

れる。

c 小結

本遺構の時期については、出土銭貨の組成より考えて、17世紀末葉～18世紀前葉と考えられる。

3 上層遺構

上層遺構としては、屋敷地割に関係すると思われる溝、および排水施設、池状遺構等がある。それらは墓が廃絶した後、そこを居住地として利用するために大規模な整地作業（削平、盛り土）を行った後、営まれたものである。以下、各遺構についてその概要を述べる。



図64 溝-01土層断面図 (S:1/20)

(1) 溝-01 (図64)

溝-01は、屋敷地割と思われる東西方向の溝状遺構であり、深さは約13cmを測る。素掘りの溝で、石組、竹樋等の施設は見られない。おそらく屋敷地内の排水機能を兼ねたものであろう。時期につ

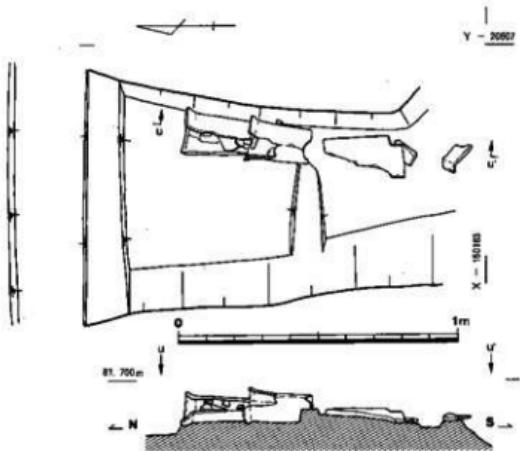


図65 排水施設-01平面図および断面図 (S:1/20)

いては、出土した土器・陶磁器（いずれも細片）より判断して、18世紀末～19世紀前葉と考えられる。

（2）排水施設-01

遺構（図65、図版18）

本遺構は、溝状遺構の肩部分において検出された、瓦質の土管を用いた排水施設である。原位置を保っていたのは土管2個体のみで、他は破壊されていた。

なお、土管に接して棟瓦が出土しており（図65参照）、本排水施設は部分的にそれらによって補強されていたものとも考えられる。時期は、後述の瓦質土器土管の形態等より考えて、18世紀末～19世紀前葉であろう。

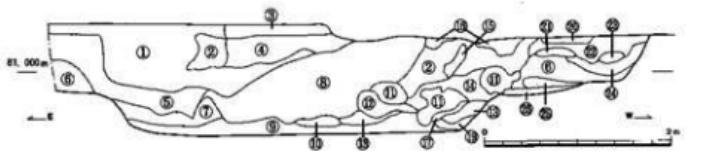
遺物（図66、図版18）

45、46は、排水施設-01に使用されていた瓦質土管である。外面調整はナデを基本とするが、上下端部は内外面共にヨコナデを施す。なお、内面には横方向の擦痕が顕著に残る。

（3）池状遺構

遺構（図67、図版19）

本遺構は、時間的な都合により面的な調査はなし得なかったため、サブトレンチによる断面観察、ならびに出土遺物による時期の確定に主眼をおいた調査を実施した。以下は、そうした制約された条件下における観察所見である。



- ①にい黄緑（10YR6/4）粘質粗砂層（炭、石粒含む）
 - ②黄褐（2.5Y5/5）粘質土層（炭、石粒含む）
 - ③暗灰黄（2.5Y5/2）粘質土層（石粒含む）
 - ④明黄褐（10YR7/4）粘質土層（炭石含む）
 - ⑤にい黄緑（10YR5/3）粘質土層
(浅黄（5Y7/3）粘土ブロック含む)
 - ⑥黄灰（2.5Y6/1）粘質土層
 - ⑦黄灰（2.5Y6/1）粘土層
 - ⑧明黄褐（10YR6/6）粘質土層
(浅黄（5Y7/3）粘土小ブロック含む)
 - ⑨灰（5Y5/1）粘土層
 - ⑩暗灰（10CY6/1）砂漠じり粘土層
 - ⑪灰白（7.5Y7.2）シルト層
 - ⑫灰（5Y5/1）粘質土層
 - ⑬暗灰黄（2.5Y5/2）粘土層
- ⑭黄灰（2.5Y7/2）砂層
 - ⑮明黄褐（10YR6/6）粘土層（石粒、粗砂含む）
 - ⑯にい黄緑（10YR6/4）粗砂層
 - ⑰黑褐色（10YH3/1）粗砂層
 - ⑱灰白（5Y7/1）粘質砂層（浅黄（5Y7/3）粘土小ブロック含む）
 - ⑲灰白（10Y8/1）粗砂層
 - ⑳灰黄（3.5Y7/2）粘質土層
 - ㉑明黄褐（10YR6/8）粗砂層
 - ㉒浅黄（5Y7/3）粘土層
(黄褐（2.5Y5/4）粘質土層間にに入る)
 - ㉓にい黄緑（10YR5/4）粗砂層
 - ㉔オリーブ褐（2.5Y4/3）粘質土層（石粒、粗砂含む）
 - ㉕黄椎（10YR7/8）粗砂層
 - ㉖黄灰（2.5Y6/2）粗砂層じり粘土層

図67 池状遺構土層断面図（北より S:1/60）

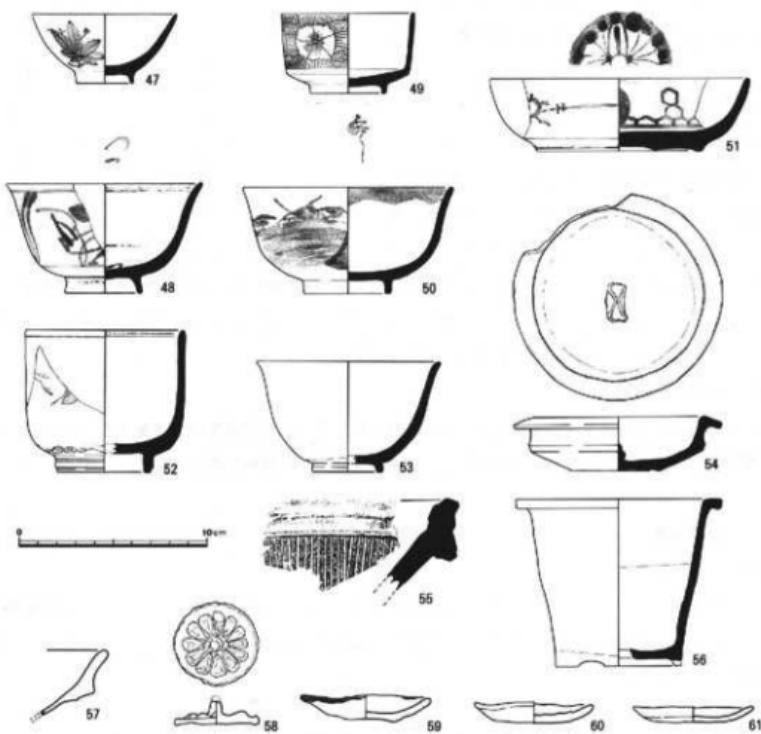


図68 池状遺構出土遺物実測図1 (S:1/3、56のみ1/6)

池状遺構の断面形状は、肩部（池西岸部分）を二段掘りとし、底面はフラットである。なお、遺構内堆積土は、明らかに人为的に埋積された状況を呈している。深さは検出面より約1.2mを測る。なお、池自体の規模は今回は明らかにすることはできなかったが、サブトレンチ2において池東岸の一部が検出されており、それから推定される池の東西長は約9mとなる。

次に本遺構の性格であるが、それについて郡山城第35次調査において検出された「金魚池」が最も妥当するであろう。⁽³⁾ III章でも触れるが、18世紀末～19世紀にかけて、郡山城下では下級武士の副業として金魚の養殖が盛



図69 池状遺構出土遺物実測図2 (S:1/2)

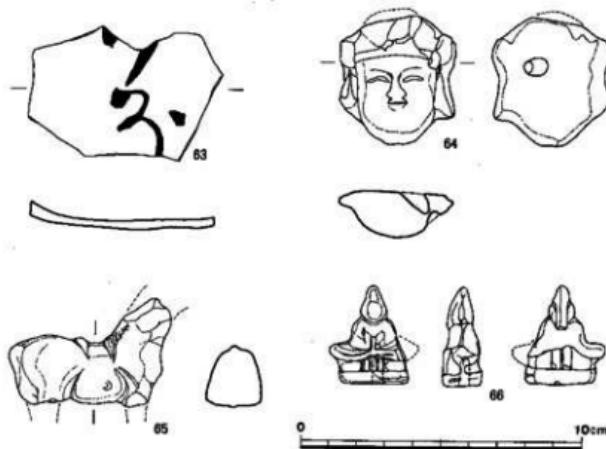


図70 池状造構出土遺物実測図3 (S:1/2)

んに行われる。本調査地はそのころ下級武士の居住地であったことが絵図等より知られ(第Ⅲ章-1参照)、こうした池状造構は、彼らの重要な現金収入源としての金魚養殖に用いられたものであろう。

遺物(図68、69、70、図版19、20、21)

以下、池状造構の人为的埋積土中より出土した遺物について述べる。

47(以下図68)は、肥前磁器染付小坏である。外面に楕(?)の意匠を手書きによって描く。同一の意匠を数個所(破片のため正確には不明だが、推定5ヶ所)に配するのが特徴である。

48は、磁器染付碗(端反形)である。粗い線描により文様(意匠不明)を描く。なお、須は鮮やかなコバルトブルーを呈し、やや施文部分が盛り上がるが特徴。郡山城下では19世紀代の造構より同種の染付磁器が出土することが多い。おそらく、肥前以外の地域(瀬戸か?)で生産された製品であろう。

49は、磁器染付碗(筒形)である。花卉文(6ヶ所か?)の間を細い線描の幾何学文で埋めている。

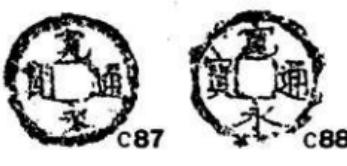


図71 池状造構出土銭貨拓影 (S:1/1)

50は、磁器染付碗（丸形）である。施文には比較的鮮やかなコバルトブルー系の呉須を用いている。外面の意匠はごく簡略化された山水文、内面は口縁部に墨弾きによる曲線文、見込には昆虫文をそれぞれ描いている。

51は、肥前磁器染付皿である。底部が蛇の目凹形を為すのが特徴。外面に草文を描き、内面には龜甲文、および見込には花卉文が描かれている。

52は、肥前磁器染付碗（筒形）である。破片のため图案の意匠等は不明だが、上質の呉須を用いた丁寧な作風である。また、器表面はやや緑色味を呈し、非常に滑沢な仕上がりである。伊万里焼の上製品であろう。

53は、灰釉陶器碗（丸形）である。外底面を除く内外面に薺灰釉が施されている。なお、施釉面は貫入が著しい。胎土は燈色を呈し、比較的軟質である。

54は、鉄釉陶器蓋（落とし蓋形）である。釉色は鉛色を呈する。胎土は燈色を呈するが、あるいはこれは熱による変色の可能性もある。

55は、堺焼擂鉢である。擂目は4本/cm。白神編年のII型式に属する。

56は、灰釉陶器鉢（楕木鉢形）である。釉色はやや黄味を帯びたもので、表面に細かい貫入が無数に走り、ところどころで釉が剥落している。胎土色は黄味がかった明燈色であり、やや粗粒の鉱物粒を多く含むのが特徴。瀬戸産か？

57は、土師質炮烙である。口縁部が大きく段をもって屈曲しているタイプ（難波分類 Fb 類）である。なお、本個体は口縁部の伸びが短いもので、19世紀代のそれの特徴を示している。なお、胎土中には細かな雲母粒が多く含まれている。

58は、施釉土師器の型打ち製品である。上面に菊花状の造形が見られる。釉色は黄味がかったライトグリーンであり、上面にのみ施釉する。本製品の具体的な用途については不明だが、あるいは玩具に類するものであろうか。

59～61は、土師皿（小型品）である。59のみが白色系、他は赤色系であり、後者については内面に當て布の調整痕を残す。いずれも灯明皿として使用されたものであろう。

62（図69）は、線釉陶器土瓶の把手である。上面に「舍」銘、下面に「和州赤ハタ」銘を有する。このうち特に後者は、江戸時代後期以降、大和の特産品として知られるようになった、陶器の赤唐焼を示すものであり、注目される。なお、本資料の持つ歴史的意義については、本書第IV章第2項において若干の検討を試みている。

63（以下図70）は、土師皿（中型品）の底部付近の破片である。外面にひらがなと思われる墨書きを持つが、字体は不明。下層構造、近世墓の副葬品の混入であろう。

64は、面形の土製品（型打ち）である。大黒様を象したものか？背面には造形ではなく、背面より向かって左側に偏した部位に穿孔がみられる。あるいはけん垂用だろうか。

65は、馬形の土製品（型打ち）である。頭部、および脚部を欠く。鞍、鎧等は比較的写実的であ

る。

66は、人形の土製品（型打ち）である。内裏様を表したものであろう。下面には穿孔があり、おそらくこれをを利用して小さな舞段等の台に固定したものだろう。

c 87、c 88（図71、図版22）は、銅錢（寛永通宝）であり、両者共にいわゆる「新寛永」である。下層遺構、近世墓の副葬品が混入したものであろう。

以上の遺物は、下層遺構からの若干の混入品を除くと、いずれも18世紀末～19世紀にかけての時期に比定することのできるものである。ただし、遺物群中には型紙摺り、酸化コバルトによって施文された磁器は一点も見られることから、本遺構が人為的に埋められたのは、仮に明治年間としても、比較的初期の段階に限定できるだろう。

4 包含層出土遺物（図72、図版22）

本章の最後に、遺構以外の部分より出土した包含層出土遺物について紹介しておく。

67は、肥前磁器小壺である。外面にはごく簡略化された風景を描く。形態的には口縁端部が強く外側に屈曲するのが特徴である。なお、高台脛付には離れ砂が付着している。

68は、肥前磁器染付小壺である。外面に簡単な山水文を描く。高台脛付には離れ砂が付着している。

69は、肥前磁器染付鳥形蓋である。香合の蓋である。おそらく雉を表象していると思われるが、鳥の部分については、型打ち成形されたうえに、非常に細密な須による模様が描かれている。また蓋部について

は型打ちの後、雲形の意匠の片肉彫り陰刻が施される。また、内面については無釉であるが、二重の方圓線中に「鷺」かと思われる細筆書きの銘がある。

以上の遺物は、いずれも17世紀後半期のものと思われ、本来は近世墓の副葬品であったものだろう。

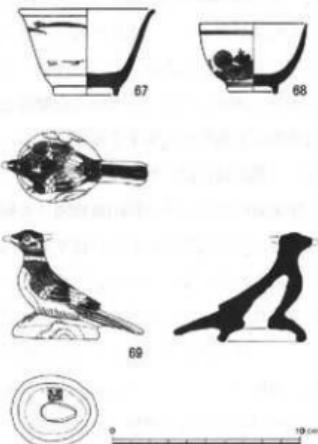


図72 包含層出土磁器実測図 (S:1/3)

III まとめ（考察）

1 調査地における土地利用の変遷

（1）絵図に見る土地利用の変遷（図73）

郡山城、およびその城下を描いた絵図としては、現在十数例が知られている。本項においては、そのひとつひとつについて詳細に紹介する余裕はないが、ここではそれらの内、今回の調査地周辺の状況を比較的明瞭に書き記したもの数例を取り上げ、調査地の土地利用の変遷について見てみたい。なお、ここで取り上げる絵図については、いずれもその一部分（調査地周辺）である。

① 和州郡山城絵図（通称「正保絵図」 図73-①） 国立公文書館内閣文庫蔵

幕府の勅令によって正保年間（1644～1648）に作成された絵図。精度はきわめて高いとされる。該図によれば、調査地周辺は「侍町」の範囲に含まれるが、そこには具体的な土地割の記載がない。つまり、該図によれば、当時調査地周辺が武士の居住地として意識されていたことは確実であるが、具体的な土地利用に関する情報は、そこから読み取ることはできない。

② 〔郡山城古図〕 標題等なし（通称「貞享絵図」 図73-②） 個人蔵

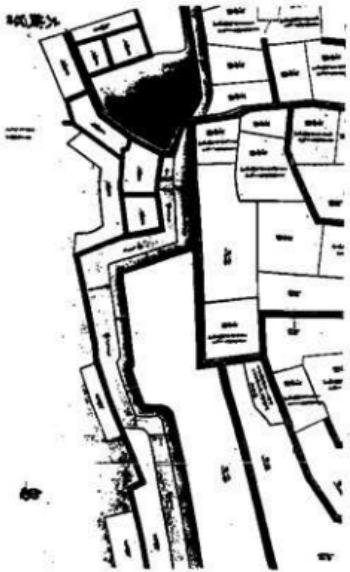
年次資料だが、他の郡山城絵図（大和国添下郡郡山町地図 国立公文書館内閣文庫蔵）等の資料により、その時期がおおむね貞享頃（1684～1688）とされるもの。本図では寺社名のほか、武士名も記入されている。なお、調査地については「久松寺」、つまり寺院としている。この久松寺（曹洞宗）については、良好な文献資料に恵まれないため、その具体像は明確にすることはできない。また、久松寺は元文2年（1737）に現在の城町（今回の調査地の西側、郡山城城下外になる）に移転、再興されたようであるが、現在は墓地にその名称を残すのみで、建物等は残っていない。

③ 和州郡山城図（通称「元禄絵図」 図73-③） 国立公文書館内閣文庫蔵

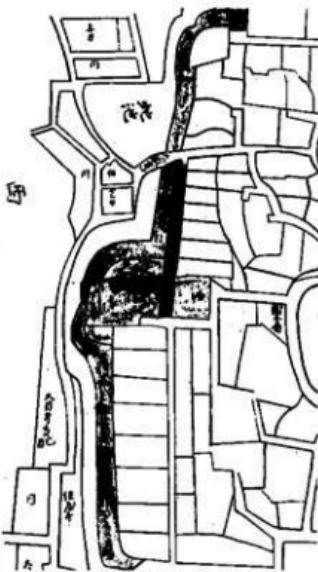
元禄年間（1688～1704）のものとされる絵図。侍屋敷、寺社、町屋、濠、土居、道等を色分けする。ただし、寺社、町名は記入されるが、武士名等は記入されない。なお、調査地については「円光院」つまり寺院として表現されている。この円光院については、文献資料等は現状では皆無であり、したがってその具体像については全く不明である。ただ、それは先述の「久松寺」の異称の可能性もある。

④ 安政年間和州郡山藩家中図（通称「安政絵図」 図73-④） （財）柳沢文庫蔵

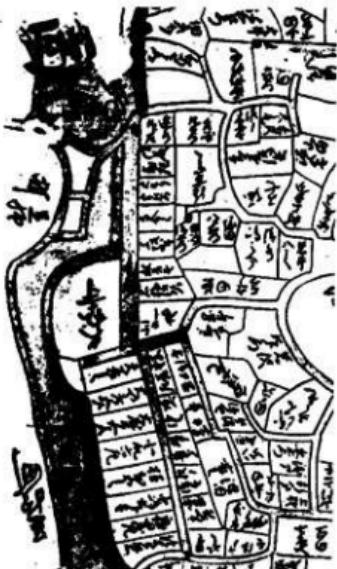
安政年間（1854～1860）の作成と伝える絵図である。地目毎に色分けされた図中には、居住した武士個々の氏名が描かれる。なお、調査地周辺は、貞享、元禄の頃とは全く異なり、小区画された下級武士の屋敷地として利用されていることがわかる。



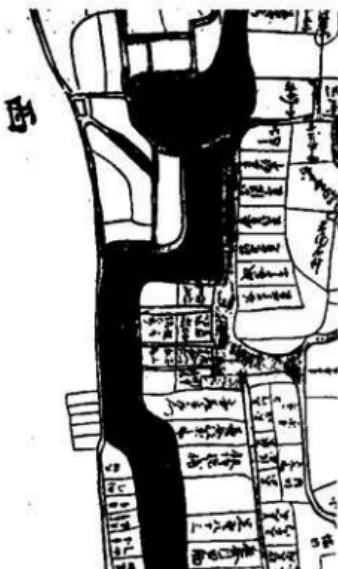
① 正保繪図



③ 元禄繪図



② 貞享繪図



④ 安政繪図

図73 絵図に見る調査地周辺の状況

(2) 遺構に見る土地利用の変遷

前項においては、絵図による調査地周辺の土地利用の変遷について見てきたが、本項では今回の発掘調査によって検出された遺構より、それを見てゆくこととする。

① 墓地

今回の調査地において明らかに土地利用の痕跡が認められるのは、17世紀後葉からであり、それは具体的には墓域としての土地利用であった。ちなみに、近世期においてはそれ以前に当該地が利用されていた痕跡はない。また、ここで形成されていた墓地が廃絶するのは、18世紀の前葉である。なお、ここが墓地であった頃、それはまだ自然地形（丘陵鞍部）をそのまま利用していたものようである。

② 居住地

今回の調査で得られた知見に沿う限り、当該地が墓地の廃絶後、居住地（屋敷地）として利用されるようになるのは18世紀末～19世紀初頭頃である。それは、今回の調査で18世紀中葉～後葉にかけての土器・陶磁器の出土がほとんど見られなかった、という点に端的に示される。なお、当該地を屋敷地として利用するにあたっては、きわめて大規模な整地を行ったものと思われる。先述のように、ここが墓地として利用されていた時、それは自然丘陵を大幅な人工改変を加えずに、自然地形に近い形で利用していたと思われるが、そこに居住地を展開させるにあたり、丘陵および谷部は削平、盛り土によって平坦な地形となるように人工改変を受けることとなった。その際、丘陵の頂部、および頂部周辺付近に存在した近世墓は消滅、ないしは大きく削平されたものと思われる。また、ここが屋敷地となった後、そこに居住した武士（屋敷割より考えて、それは下級武士であろう）は、その屋敷地内部に金魚池と思われる施設を持っていた。なお、この屋敷地が廃絶するのは、金魚池状遺構が人為的に埋められる時期（19世紀中葉、遺物組成より考えて明治10年代以降には下らない）と考えられる。

(3) 小結

以上、絵図、ならびに遺構の両面より調査地周辺の土地利用について見てきたが、ここでその両者のデータを総合したうえで、若干の推測も交えての調査地の土地利用変遷を総括してみたい。

近世期において当該地が利用されるようになるのは17世紀の後葉からである。それ以前については、正保絵図（17世紀中葉）等の資料からも具体的な情報は読み取れない。おそらく当該地周辺は自然丘陵の状態であったものと思われる。

次いで、先述のように17世紀後葉よりここでは墓地（土葬墓群）が展開するようになる。それは、貞享絵図、ないしは元禄絵図に記されている、久松寺（貞享絵図）または円光院（元禄絵図）と関係する墓地であろう。墓地は自然丘陵にさほど手を加えていない状態の丘陵鞍部を中心と展開していたものと推定され、墓地自体は18世紀前葉までは継続的に営まれていた。なお、個々の墓の上部

古層 (年号)	城主	支配体制	城郭の変遷	城下町の変遷
1580 (天正8)	鍋 井 家	・高井領度がこの地に目をつけ築 ばり ・信長の「中國破滅令」により、 大和國では郡山城のみ残る ・廃城、郡山城に入る	・「朝邑合三千石、只今の本丸を上げ にて佐原、二ノ丸に家老を割り、家来百 姓入り交じて居候よ申候経」(郡山城田記)	・筒井城下の筒家郡山に移転。本町・旗町・ 魚町の成立
1585 (天正13)	豊 臣 家	・豊臣秀長が入部 (100万石)	・本格的な築城の開始 ・紀州根来寺の大門を城門として利用 ・春日社の水谷川から大石を運び出し、郡 山に運ぶ。石が不足し、多くの礫石、石 塊、五輪石などが堆積される。 ・本丸是沙門院、御印野、織田野、二の丸、 キリソ野、玄武院の完成	・奈良での商売を禁じ、郡山城下繁榮業を はかる。 ・筒井制度はじまる。藩主13町の成立 (本町・旗町・酒町・御町・今井町・ 鶴町・御町・奈良町・源氏町・木町・ 木町・細屋町・豆腐町) 多武隈大森坂の郡山城
1596 (文禄4)	増 田 家	・増田長盛入部 (20万石) ・増田長盛改封	・外堀は撤去 (外堀) の看板にかかる。 外堀の完成→郡山城の規模固定。 (最終長50丁13間、内側に土居、外側が 堀)	・城下町の発達。家中も城下に集中し始め、 侍屋敷も多くなる。
1600 (慶長5)	商 家	・大久保長安郡山在番、京良代官 となる ・大坂の陣で、郡山城下焼き払 われる。	・郡山城建物状況見城に移す。	
1615 (慶長5)	水 野 家	・水野勝成入部 (6万石)	・石垣、堀の修築 (幕府直轄) ・二ノ丸台所角櫓、本丸御殿、三ノ丸、家 中屋敷の修復	
1618 (元和4)	松 平 家	・松平忠明入部 (12万石)	・二ノ丸星形の造営 ・鉄御門、一ノ丸御門、桜門、西大手門 の城門を伏見城より移す ・近世郡山城の威容が整う	・五軒屋敷整う ・侍屋敷、広島町ができる ・越後町東端の横城町 (遊郭) の興象寺に 移す
	本 多 家	・本多政勝入部 (19万石)	・将軍上洛時建設の本丸星形のとりこわし	・武定屋敷の増築 (2757人の家臣団) ・京口町東・新九条町・高田町・片原町・ 祇園町・柳6丁目が建てられる。「御 け市」と称する町屋もできる ・城下の家数は、4700戸、人口20000人 (漢字には隸ぐ) を数え、近世城下町最盛 期をむかえる
1679 (延宝7)	松 平 家	・松平信之入部 (8万石)		・本多家時代の新屋九鬼忠幹ならびに広島 町の家屋敷数を取り扱い田畠化 ・大火の発生により、町屋1670軒余焼失
1685 (貞享2)	本 多 家	・本多忠平入部 (12万石)		・侍屋敷を広島町に遷営 ・火見櫓4ヶ所統てる ・城の復旧に町屋は瓦葺、塗り込め、土 蔵、倉庫、佛能造を奨励。 ・二度目の大火発生により、本家490軒、 僧家34軒、寺4カ所喪失 ・家中屋敷の縮小 (150~160軒とり算し)
1724 (享保9)	堀 武 家	・堀武家里入部 (15万石) ・金魚の御育始まる ・大和國民5~6千人免乞す ・御作時代における城郭の規模 外堀の最終長 50丁13間 (享保7年8月)	・城郭構造整う ・武定屋敷次第 ・武定屋敷 ・内堀 (外堀の内) 落本13町合計27町・外 堀 (外堀の外又は年寄地) ・外堀本13町 ・諸屋敷組合「寛」なる ・光安寺・佛失、鶴町火事 ・柳町村、村づくり (御賜タシボ) ・諸屋敷間接の成立 ・烈火大火 (鶴町村、茶町、野庭内町消失) ・郡山木彌磨 ・天明の大木彌磨 (大風雨、洪水、凶作) ・寛政の大木彌磨により、侍屋敷78軒、町屋 107軒、領内民家123軒焼れる ・郡山町敷、検地改 ・安政の大木彌磨 (御賜150軒、半額400軒)	
	堀 武 家	・堀武家里入部 (7,274坪) ・堀武家天守閣 ・堀武家門 ・堀武家門曲輪 ・堀武家門 ・堀武家門	二ノ丸 ・五軒屋敷 ・御御殿 (三曲輪内蔵、四ヶ所九戸前、郡山詔御用米四千石常備) ・御御門櫓 (3間) 天守閣2重、鉄砲狭間3、窓1、出格子1 ・御御門櫓 (5間) 天守閣2重、鉄砲狭間3、窓1、出格子1 ・御御門櫓 (3間) 天守閣2重、鉄砲狭間6、出格子2、亘石落 ・御御門櫓 (3間) 天守閣2重、鉄砲狭間4、窓1、出格子2、 ・御御門櫓 (10間)	

表1 郡山城関連年表 (註6文献より)

表徵（墓石等）はこれまでたびたび述べてきたように、後の屋敷地造営に伴う整地事業によって全く遺存していない（ただし、現在の「久松寺墓地」内においては宝永5年<1708>の墓碑銘を持つものがあり、これなどはかつて当該地より移転されたものの可能性がある）。

その後、18世紀中葉～後葉にかけて当該地が利用された痕跡は、少なくとも今回の調査データの中には見当らない。ここが再び利用されるようになるのは、遅って18世紀末～19世紀初頭である。なおその際は墓地の破壊はいうまでもなく、地形そのものも大幅な人為改変を受けた。今回は面的な調査をなし得なかったので詳細は不明だが、ここではそうした整地事業の後、小規模な武士の居宅が営まれていたようである。すなわち、それはおそらくは安政絵図（図73-④）に見られるようなものであるが、今回の調査においてもそれに見合うような屋敷地割の溝（溝-01、排水施設-01等）が検出されている。また、特筆されるのは、金魚池状の遺構の存在である。現在の大和郡山市名産の金魚は、その商業的な養殖の起源は18世紀末から19世紀、すなわち幕末頃の下級武士の副業であったとされ、郡山城下における若干の発掘調査事例もそれを裏付けている。

それではこうした墓地の破壊（当然その一部は移転されたであろうが）、もしくはそれに先立つ墓地そのものの廃絶は何を契機とするものであろうか。このことに関しては、郡山城（藩）主の替代にその根本的な要因がありそうである。つまり、郡山城主として柳沢吉里が甲府より移封されてきたのが享保9年（1724）であり（郡山城主等の変遷の詳細については表1ないしは註6文献を参照されたい）、それはちょうど今回検出された墓地の廃絶年代と重なる。そして墓地に葬られた人々が武士、ないしはその家族、つまり柳沢氏の入部に伴って転封していった城主の家臣等とするならば、その遺族がもはやこの地に居住していない以上、この墓地が破壊される18世紀末までの半世紀余りという期間は、郡山城下に新たに住む人々の、その墓地に関する記憶を喪失、ないしは希薄とさせるに充分であっただろう。もとよりそこにはさらに複雑な要因が存在した可能性はあるだろうが、それを明らかにすることは現在の筆者の力量・知識の範疇外になる。いずれにせよ、墓地の廃絶の半世紀余り後、ここに生活の場を定めた人々がいたことは確実であり、また彼らはまぎれもなく郡山藩士であった。

その後、少なくとも明治10年代頃までは彼らの居住地と、そこで彼らが生活の一助として営んだと思われる金魚池は廃絶する。それは、金魚池の人の為的埋設土中からの出土遺物に近代のもの（たとえば染付磁器における型紙摺りや酸化コバルトの使用）が全く見られないことから見て明らかである。時代の変遷に伴い、彼らの生活の拠点も移転を余儀なくされたのであろうか。

以上、はなはだ雑駁としたものながら、今回の調査地における土地利用の変遷について若干の記述を行ってきた。そこでとりわけ目を引くのは、やはりかつて墓地であったところに居住地が展開する、という驚くべき事実であろう。いずれ近い将来公刊されるであろう今回の調査の正式報告においては、こうした事例が一般的であるのか、あるいは特殊な事例であるのかを、他地域の調査事例の検討を通して明らかにしてみたいが、今回はとりあえず、ここに事実報告のみを行っておく。

2 「和州赤ハタ」の印銘を持つ陶器（片）について

（1）はじめに

今回の調査では、「和州赤ハタ」の印銘（正確には成形時の押型による銘）を持つ陶器行平鍋の把手（図74-2）が出土した。また、今回の調査に先立つ郡山城第35次調査では、陶器土瓶（急須状）の体部下半に、やはり「(赤?)ハタ」の刻印を持つものが出土している（図74-1）。この両者は、いずれも幕末頃に人為的に埋積される遺構より出土した資料である。以下、この両者の持つ考古学的意義について若干述べる。

（2）事例の検討

ここでもう一度、「赤ハタ」印銘を持つ資料を概観してみよう。まず、図74-2については、先述したように陶器行平鍋の把手部分である。表面には緑釉が施されており、鮮やかな緑色を呈している。また、破断面に見る胎土の色調は明灰色を呈する。なお、先述の「和州赤ハタ」印銘の裏面には「吉」（つまり「山吉」）の印銘がある。

次いで、同1についてはごく小型の陶器土瓶である。非常に薄手、かつ精巧な作りが特徴である。ヘラによる多条沈線を体部上半、および注口部に施している。無釉。なお、「(赤?)ハタ」の刻印は既述のように体部下半に印されている。また、その刻印自体については、村上泰昭が集成した資料中にその類例を見ることができる。⁽⁷⁾

（3）近在窯系陶器について

ところで、ここで見られる「和州赤ハタ」の意味するものは、天明6年（1785）、郡山在住の住吉屋平蔵が近江信楽の「瀬戸物師職人」弥右衛門を招いて焼造を開始したとされる、「赤膚焼」そ

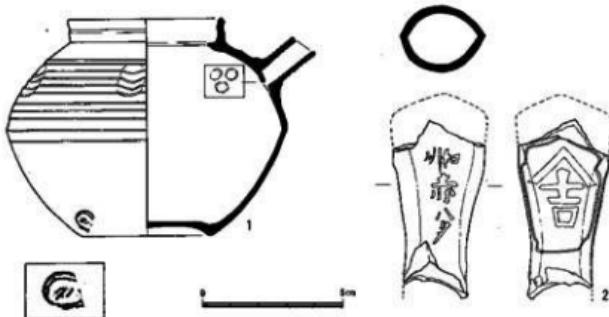


図74 「赤膚」印銘を持つ陶器実測図 (S:1/2)

のものである。⁽⁴⁾現在、赤膚焼といえば、奥田木白に代表されるような、すぐれて芸術的な作風、もしくは奈良の觀光地の土産物屋に並ぶ、大和絵が描かれたそれが想起されるであろうが、今回の出土資料は、赤膚焼が本来は日常的な雑器類を多量に焼造していたことを示すものとして注目される。

なお、ここにあげた2例は、18世紀末～19世紀後葉にかけて比較的通有に認められる器形である。また、これに止まらず、こうした陶器製品の日常雑器類に占める割合が18世紀の後葉、もしくは末にかけて著しく増加してゆく、という現象はほぼ汎日本的に認められる。筆者はこれを「近在窯系陶器」と名付け、その登場、もしくは盛行をひとつの指標として近世におけるひとつの画期を設定したことがある。その場合、「在地系土（陶）器」という耳慣れた用語を使用しなかったのは、その概念規定を行った段階では、こうした陶器製品の一部が明らかに赤膚焼であるという証拠が存在しなかったことも一因であり、こうした事情を勘案してこのような比較的曖昧な用語を用いたのである。ただし、その中でも若干触れたが、一口に「近在窯系陶器」とはいえ、それらは器種によって明らかに产地の異なるものが含まれている。したがって、近在窯系陶器と筆者が呼ぶものの一部が、赤膚焼であることを確実に示す資料が確認された現在においても、「在地系土（陶）器」の名称を使用することについては、筆者自身についていえば、未だ躊躇せざるをえない。

ともあれ、江戸時代後期に至り、全国各地で非常に多く似た形態の陶器製品が盛んに用いられ、そしてそれらはここに例を示した赤膚焼や、近年その実態が明らかになりつつある貝塚音羽焼の事例⁽⁵⁾が示すように、主に在地、もしくはその近郊において焼造された製品であった。それは、こと近畿においては肥前磁器等の日常用器に占めるシェアを明らかに蚕食したし、結果としてそれは17世紀後葉の成立以来、多くの変質傾向は見せながらも、辛うじて残存していた「近代的土器様式」を根本より変革していった。そしてそれが特徴型式として示すもの、それ自体が主体となって構築していくものこそ、次の「近代的土器様式」であった。つまり、近在窯系陶器の登場、盛行が示すものは肥前磁器等に代表されるような巨大な商圏の縮小であり、地方窯およびそれに付帯する小域流通がそれに置換してゆく過程であるだろう。

（4）小結

以上、「和州赤ハタ」の印銘と、それが提起する問題について若干触れてみた。もとより本稿は基礎資料の公表と、今後関西においても感んとなってゆくであろう近世の土器・陶磁器の研究、わけても特にその研究が遅れている19世紀を中心とする江戸時代後期の資料を検討するにあたり、その予察的な意図を持つものである。したがってここでの記述はきわめて簡略ではあるが、この内にある発展的な要素は、いずれ筆者自身の手により発展させてゆくつもりである。

〈註〉

- (1) 藤田幸夫「豊臣氏大板城三之丸から出土した桃山時代の刀」「葦火」22号 大阪市文化財協会 1989
- (2) 伊東信雄編『瑞鳳殿 伊達政宗の墓とその遺品』瑞鳳殿再建期成会 1979
- (3) 山川均「江戸時代の道路と金魚池」「古代通信」No.2 大和郡市教育委員会 1993
- (4) 白神典之「堺摺鉢考」「東洋陶磁」第19号 東洋陶磁学会 1992
- (5) 離波洋三「市坂の土器作り」「京都大学構内遺跡研究年報」1986年度京都大学埋蔵文化財研究センター 1989
- (6) 腹部伊久男「郡山城追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書」大和郡市教育委員会 1993
- (7) 村上泰昭「赤唐焼の刻印」「赤唐焼」大和文化財保存会 1991
- (8) 高橋隆博「近世赤唐焼の成立」(注7と同一文献所収)
- (9) 山川均「郡山城出土の近世土器・陶磁器について」(未刊、近日公刊予定)
- (10) 貝塚音羽焼研究会ほか「貝塚・音羽焼の諸問題」1993(シンポジウム「貝塚・音羽焼の諸問題」レジメ)

遺物No.	器種	計測値 (cm)	口徑 底径 器高	色調	外 観		内観 面	備考
					西	東		
1	土師壺	11.9	2.2	浅黄褐色	0TR8/3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
2	土師壺	12.2	2.5	浅黄褐色	0TR8/3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
3	土師壺	12.1	2.2	浅黄褐色	0TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
4	瓦質土器 壺	54.0	31.0	にぶい黄褐色	0TR7/4	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	内面黒い付着物あり 土師質化
5	土質土器 小形瓶	4.8	5.4	4.6	7.3	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	
6	土師壺	10.2	2.1	浅黄褐色	0TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
7	瓦質土器 壺	50.5	23.6(¶)	にぶい黄褐色	0TR7/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 体:ナデ	
8	磁器 瓶	9.3	4.4	5.2				中国製染付
9	磁器 瓶	10.8	4.1	5.8				
10	磁器 合子壺	16.9	8.4	43.6				馬(輪)形
11	磁器 合子壺	16.8	8.4	43.6				
12	磁器 小壺	3.6	1.9	1.7	浅黄褐色	0TR8/4		
13	土陶質 土瓶	44.1	¶.7	にぶい黄褐色	0TR7/4	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:未	口:ヨコナデ 体:ナデ 底:未	壓打ち 土製玉:手すくね
14	瓦質土器 壺	38.0	22.2	浅黄褐色	0TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
15	土師壺	9.2	1.6	にぶい黄褐色	0TR8/4	体:ナデ 底:未	口:ヨコナデ 底:ナデ	灯明皿
16	瓦質土器 壺	22.2	10.5(¶)	浅黄褐色	0TR8/3	にぶい黄褐色	口:ヨコナデ 底:ナデ	土師質化
17	土師壺	10.5(¶)	2.0	浅黄褐色	0TR8/3	オサエ	口:ヨコナデ 底:オサエ	
18	土師壺	10.4	2.2	浅黄褐色	0TR8/3	にぶい黄褐色	口:ヨコナデ 底:オサエ	
19	土師壺	10.8	2.6	浅黄褐色	0TR7/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
20	土師壺	10.5	1.9	浅黄褐色	0TR8/3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
21	土師壺	10.4	2.0	浅黄褐色	0TR8/3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
22	土師壺	10.5	2.2	浅黄褐色	0TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
23	土師壺	11.0	2.2	浅黄褐色	0TR8/3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
24	土師壺	11.0	2.2	浅黄褐色	0TR8/3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
25	土師壺	11.0	2.2	にぶい黄褐色	0TR7/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
26	土師壺	10.6	2.3	浅黄褐色	0TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
27	土師壺	12.1	2.4	浅黄褐色	0TR8/3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	

表2 出土遺物観察表1

遺物No.	器種	計測値(cm)				色調	外観	内観	箇面	備考
		口径	底径	高さ	最大径					
28	土師質 土鉢	11.6	6.4			洗黄褐10TR8/2				
29	土師質 土鉢	10.9		2.3		に点々の黒7.5TR7/4	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
30	土師質 土鉢	10.6		2.0		浅黄褐7.5TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
31	土師質 土鉢	10.9		2.1		浅黄褐7.5TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
32	磁器 小杯	6.1		2.3	3.6	浅黄褐7.5TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
33	土師質 土鉢	12.1		2.3		淡褐5TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
34	木製 紋珠玉	40.45	18.0	10.08						
35	土師質 土鉢	7.2		1.5		浅黄褐7.5TR8/5	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
36	土師質 土鉢	7.2		1.6		浅黄褐10TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
37	土師質 土鉢	7.3		1.5		浅黄褐10TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ			口:ヨコナデ 底:ナデ
38	大刀	98.1	20.7	10.6	51	輪5.1 輪4.3				
39	瓦質土器 鉢	44.6				口:ヨコナデ 体:ナデ				口:ヨコナデ 体:ナデ
40	瓦質土器 鉢	31.2	18.4	23.3		口:ヨコナデ 体:ナデ 底:未				口:ヨコナデ 体:ナデ 外面下半部記号
41	瓦質土器 鉢	36.2(8)				口:ヨコナデ 体:ナデ				口:ヨコナデ 体:ナデ ハラ描き波状文
42	瓦質土器 鉢	37.0(8)				口:ヨコナデ 体:ナデ				口:ヨコナデ 体:ナデ 土師質化
43	瓦質土器 鉢	38.0(8)				口:ヨコナデ				
44	瓦質土器 鉢	34.2				口:ヨコナデ				口:ヨコナデ
45	瓦質土器 土管	11.8	14.8	23.1		端:ヨコナデ 体:ナデ				端:ヨコナデ 体:ナデ
46	瓦質土器 土管	12.4	16.0	23.2		端:ヨコナデ 体:ナデ				端:ヨコナデ 体:ナデ
47	磁器 小杯	7.6		3.2	3.7					
48	磁器 瓢	10.4(8)	4.0(8)	5.85						
49	磁器 瓢	7.0		4.0	4.3					
50	磁器 瓢	11.3(8)	4.7	5.7						焼き締め無あり
51	磁器 瓢	14.0(8)	8.8	4.9						
52	磁器 瓢	8.5(8)	4.9(8)	7.6						
53	陶器 瓢	9.8(8)	3.8	5.9						
54	陶器 瓢	9.1		2.8	11.2					

表3 出土遺物調査表2

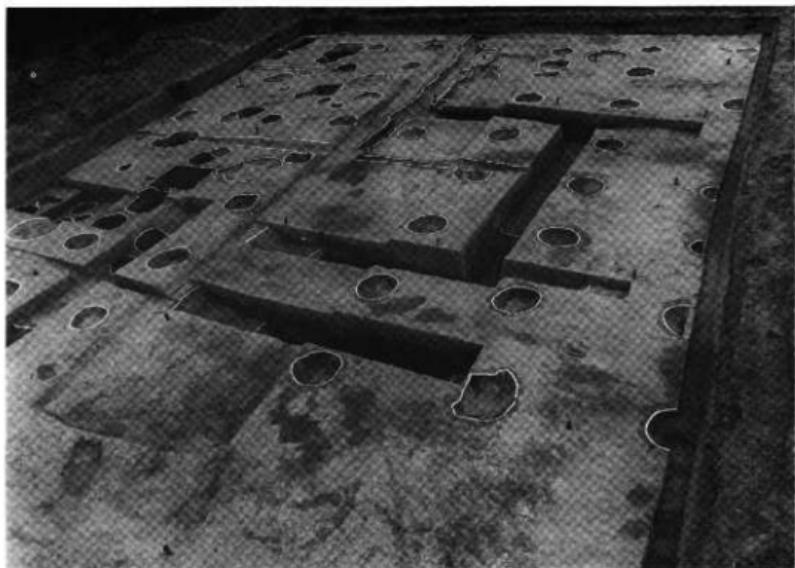
遺物No.	器種	計測値 (cm)	色調	調査面		備考
				外 面	内 面	
55	擂钵(斧先)					
56	陶器 鮑木鉢	22.0(口) 底径 13.4 深 18.0	にぶい黄7.5TR7/4	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ナデ	
57	土師器 炊壺		灰白10TR8/1			墨打ち
58	施釉土師器	14.6	にぶい黄10TR8/4	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	灯明皿
59	土師皿	6.9	1.3	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	灯明皿
60	土師皿	6.4	1.1	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	灯明皿
61	土師皿	6.4	0.8	口:ヨコナデ 底:オサエ	口:ヨコナデ 底:ナデ	
62	陶器 行平		灰オリーブ7.5TR5/2			赤繪紋あり
63	土師皿		焼黄緑10TR8/4			外腹に通管あり
64	土製 人形	14.5(口) 14.1	15.9(口)			墨打ち
65	土製 人形		15.5	15.7 5TR7/6		墨打ち
66	土製 人形		13.5	13.8 烧黄緑10TR8/3		墨打ち
67	磁器 小壺	7.3	3.4	4.7		
68	磁器 小壺	5.8	2.7	3.8		
69	磁器 合子壺	15.8	15.8			鳥(鳩)形

表4 出土遺物調査表3

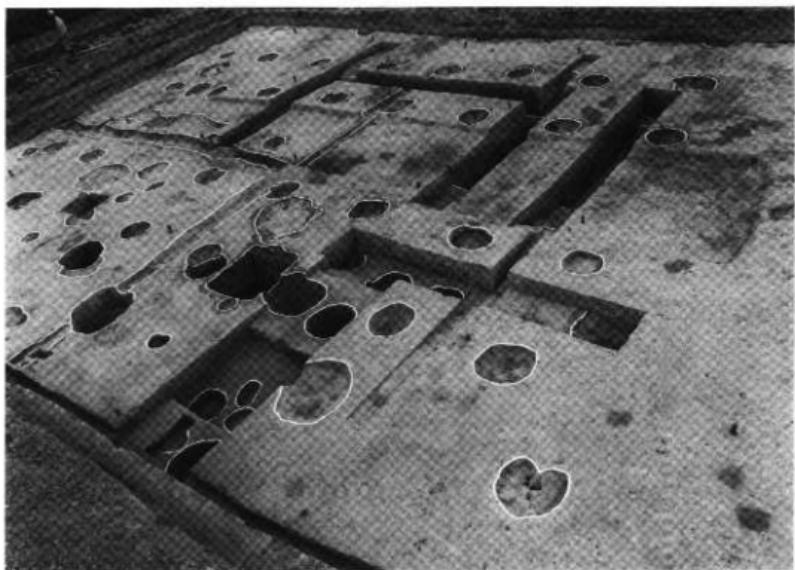
墓No.	有	無	寛永通宝			合計	墓No.	有	無	寛永通宝			合計
			古	文	新					古	文	新	
1	有		6			6	12	無					
2	有		6			6	13	無					
3	有		1			1	14	無					
4	有		6			6	15	無					
5	有	1*	4	4		9	16	無					
6	有		1		1	2	17	無					
7	有		1		7	8	18	無					
8	有		2		4	6	19	有		2	1	2	5
9	有		2	1	3	6	20	有		1		4	5
10	有		1		5	6	21	有		2	4	6	
11	有		3	9	6	18	* 元豐通宝 北宋錢初鑄1078年						

表5 近世墓出土錢貨組成表

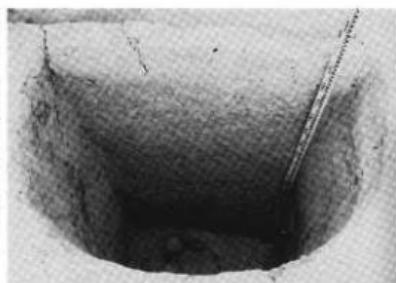
図版



1.調査地全景（南より）



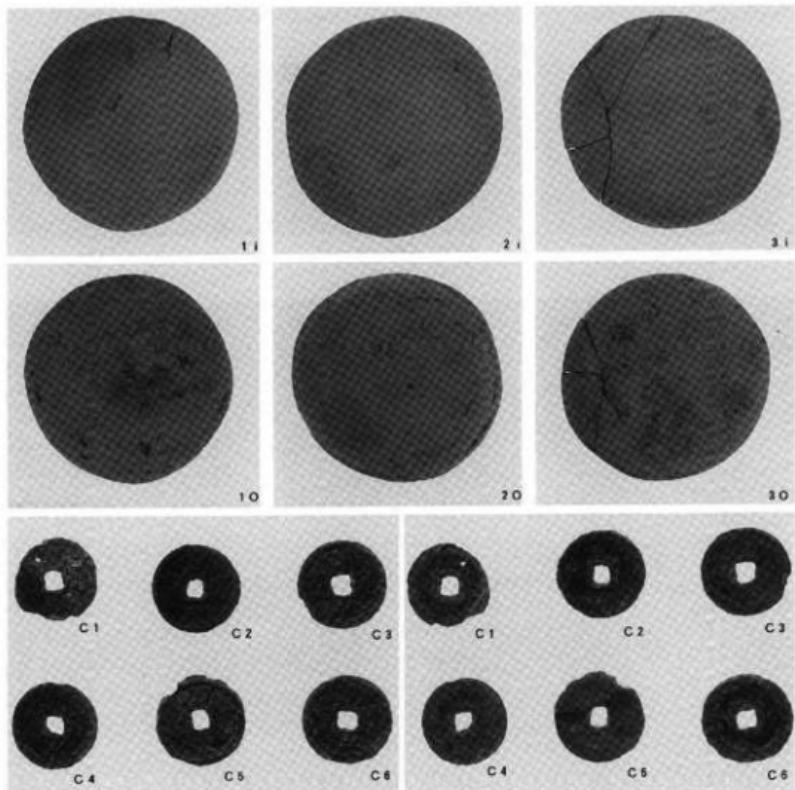
2.同上（西より）



墓-01半掘状況(東より)



遺物出土状況



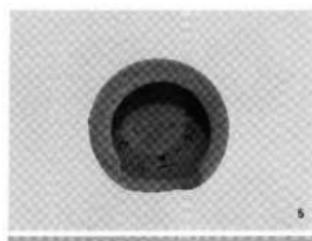
墓-01出土遺物



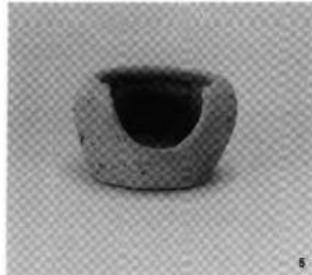
墓-02半壊状況（南より）



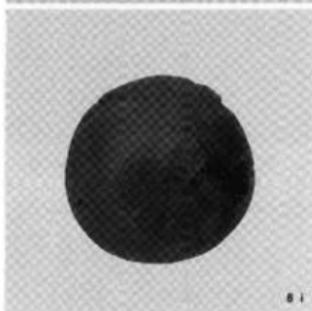
壺棺内の状況



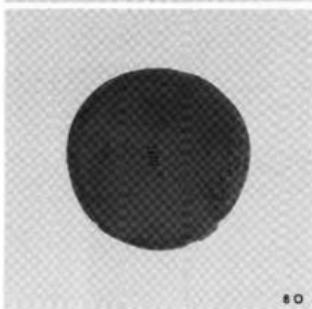
5



6

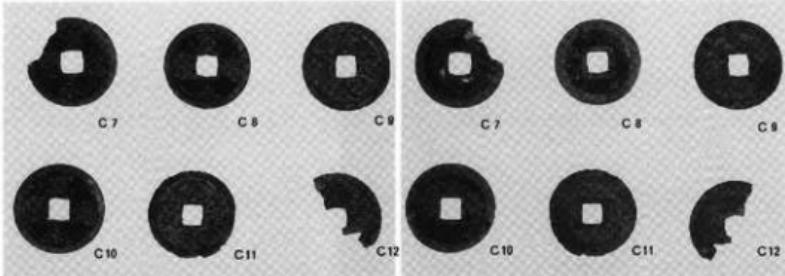


6-i



6-o

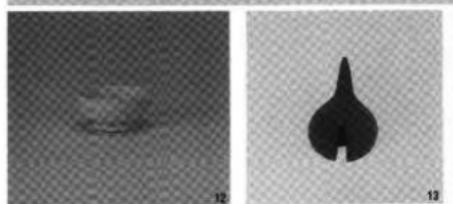
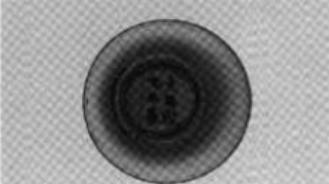
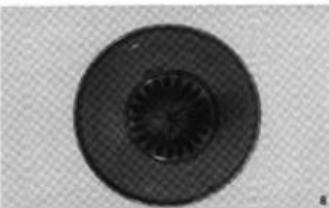
墓-02出土遺物



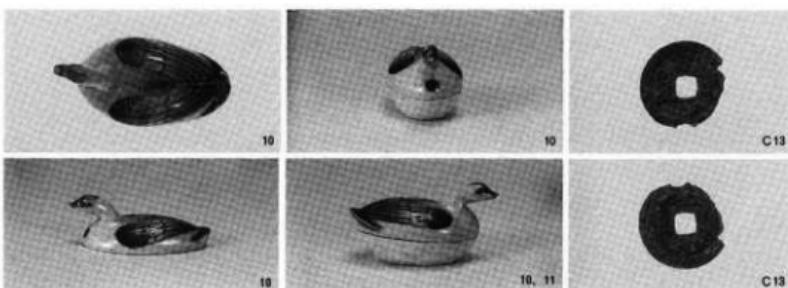
墓-02出土錢貨



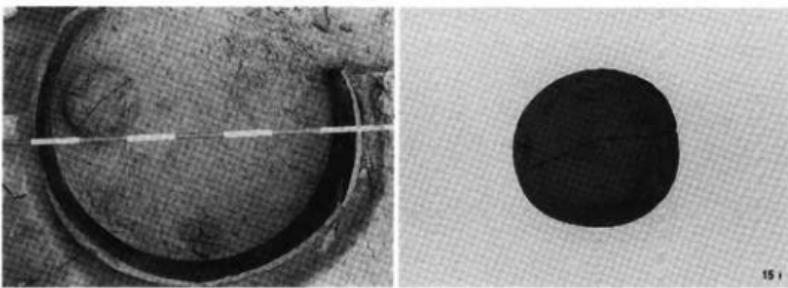
墓-03遺物出土状況（上下は墓-04 南より）



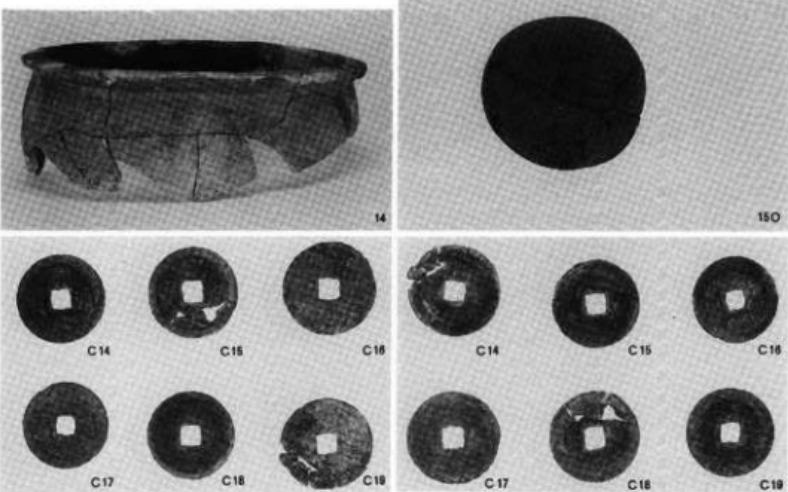
墓-03出土遺物



墓-03出土遺物



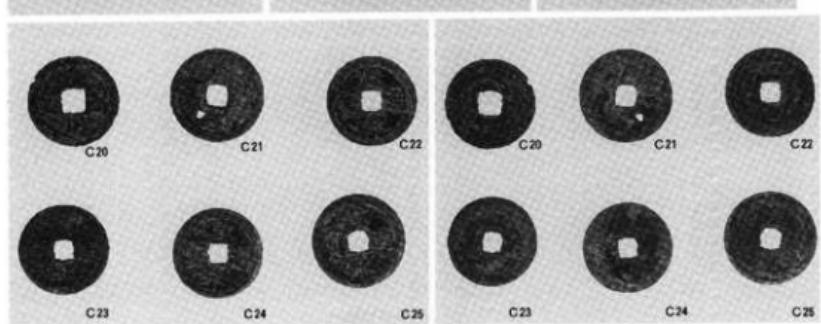
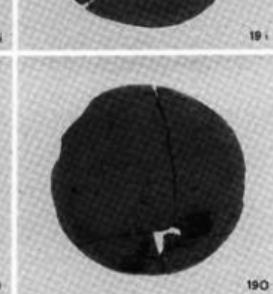
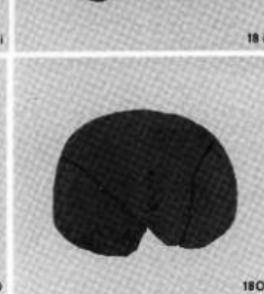
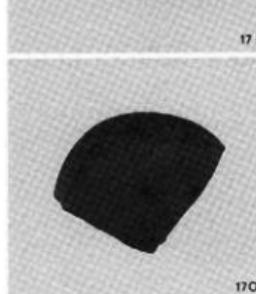
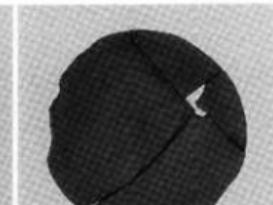
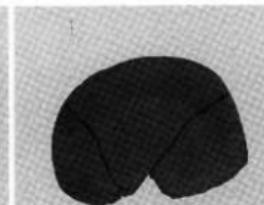
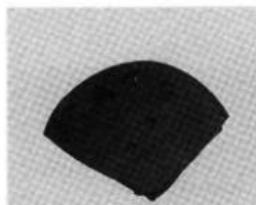
墓-04遺物出土状況（南より）



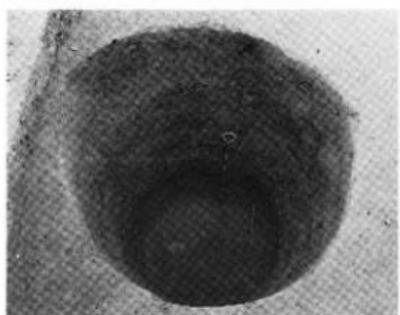
墓-04出土遺物



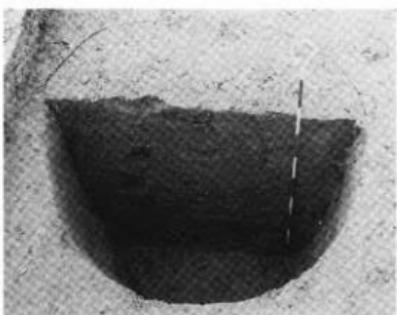
墓-05壺内遺物出土状況（北より）



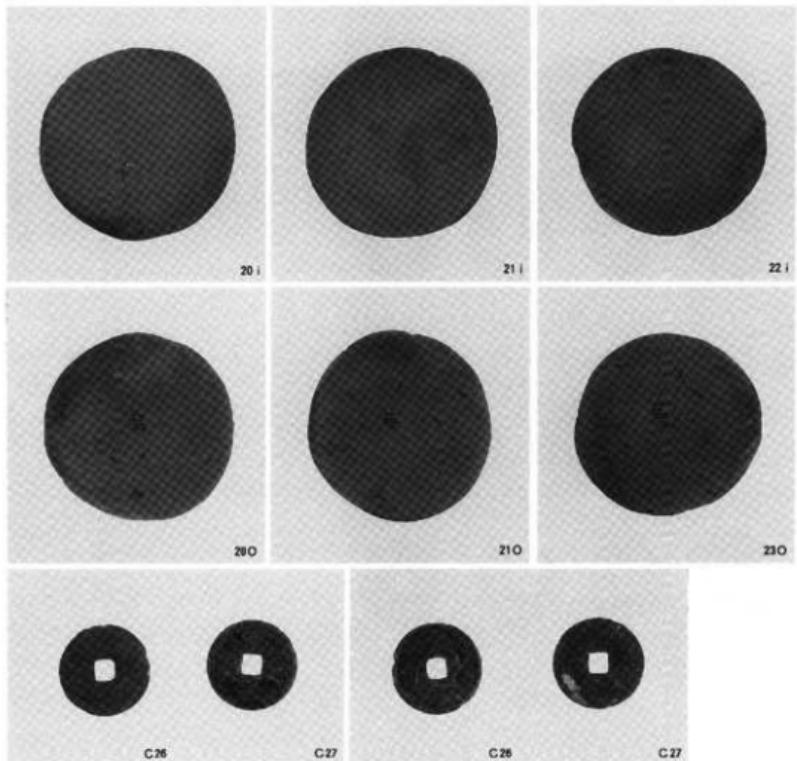
墓-05出土遺物



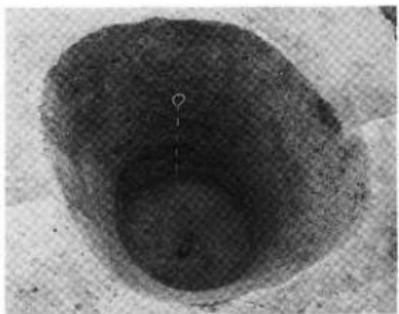
墓-06完掘状況（東より）



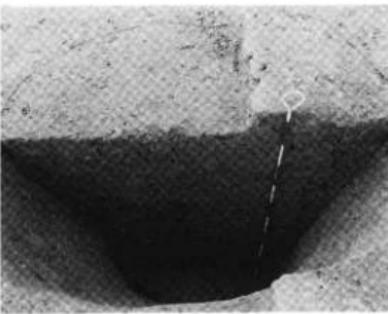
墓-06半掘状況（東より）



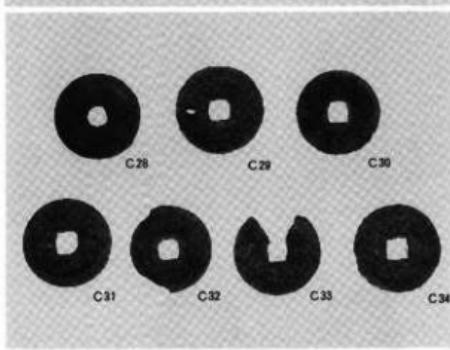
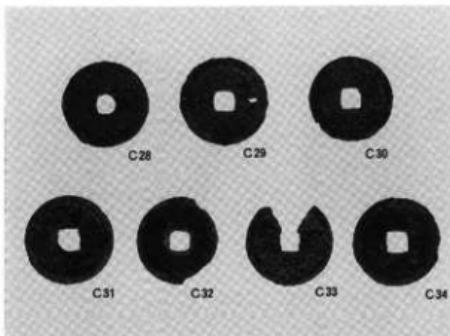
墓-06出土遺物



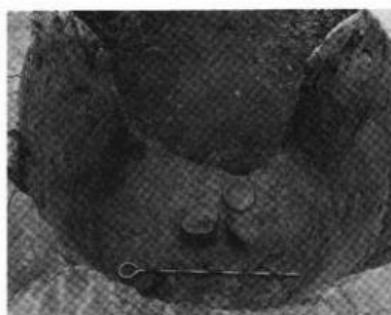
墓-07完掘状況（南より）



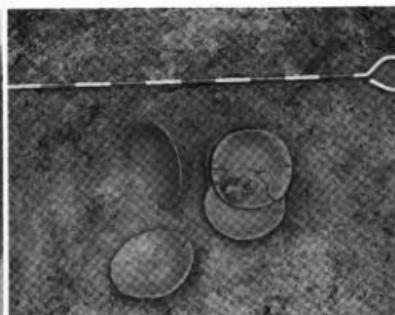
墓-07半掘状況（東より）



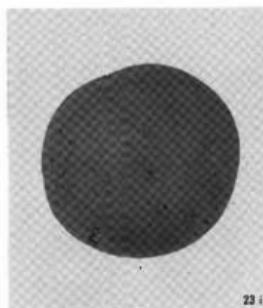
墓-07出土銭貨



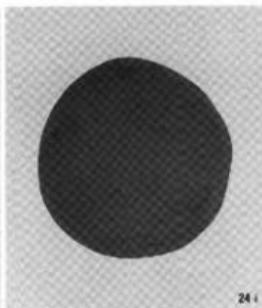
墓-08完掘状況（南より）



墓-08遺物出土状況



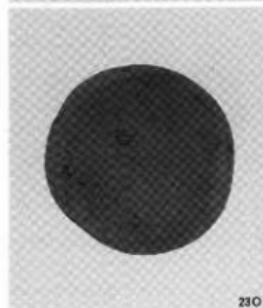
23i



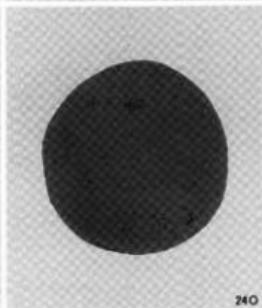
24i



25i



23o

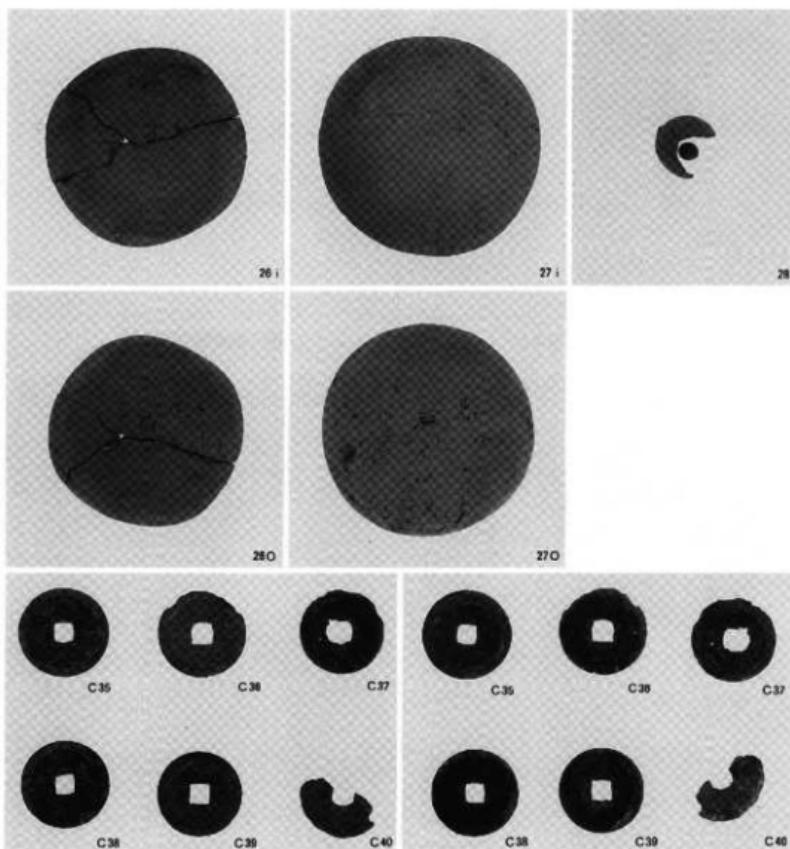


24o

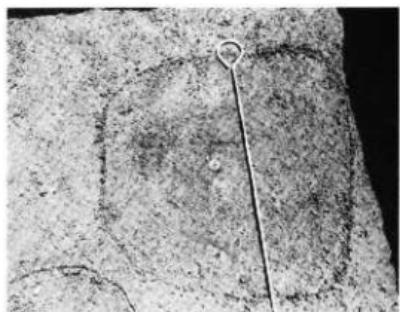


25o

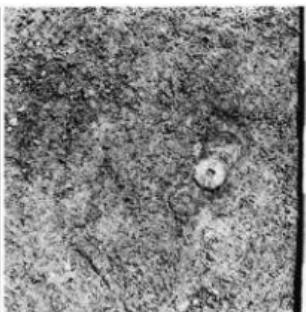
墓-08出土遺物



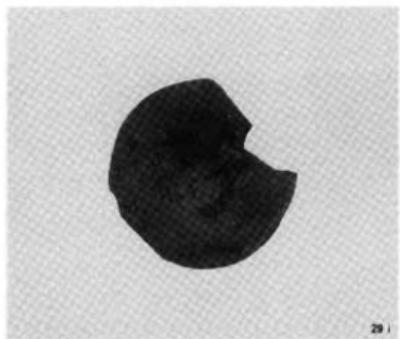
墓-08出土遺物



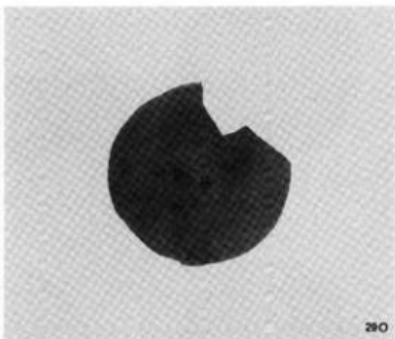
墓-09完掘状況（北より）



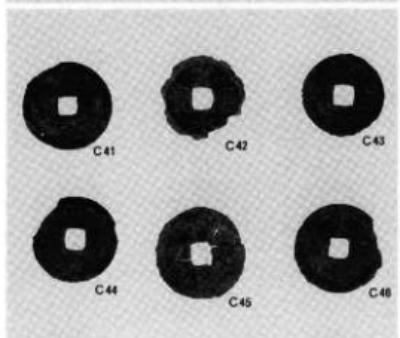
墓-09遺物出土状況



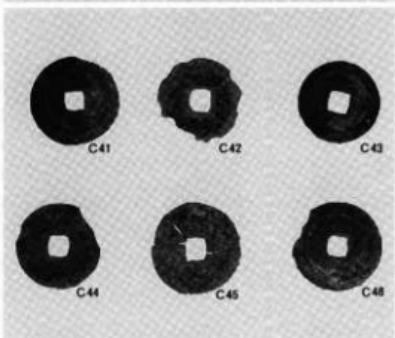
29 i

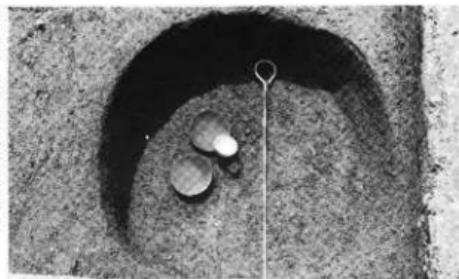


29 o

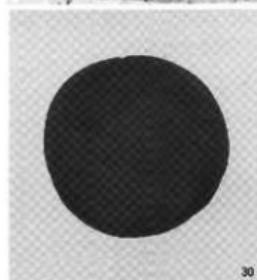


墓-09出土遺物

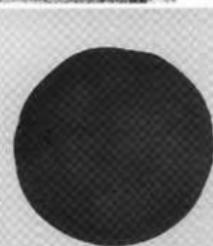




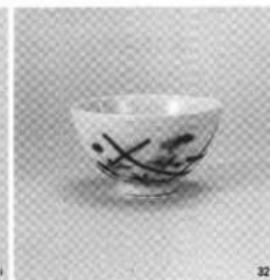
墓-10遺物出土状況（北より）



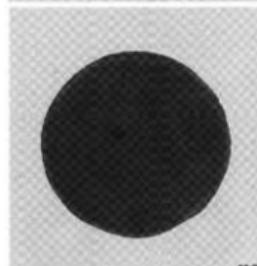
30 i



31 i



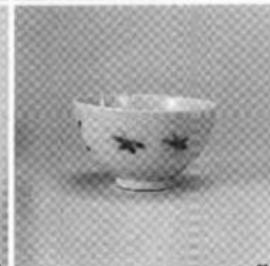
32



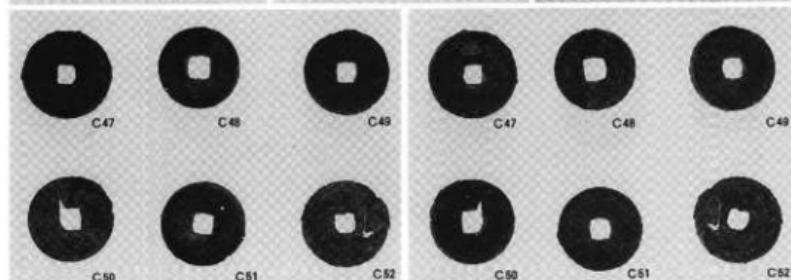
30 O



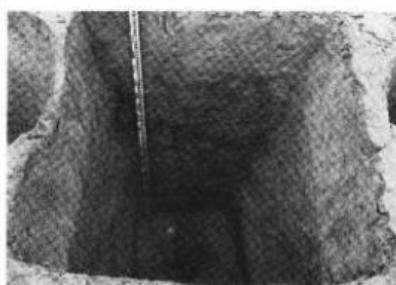
31 O



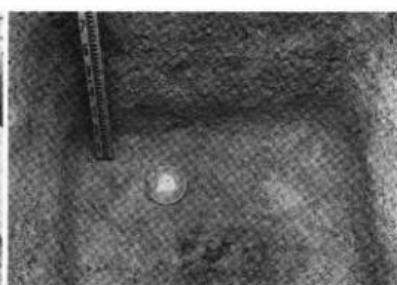
32



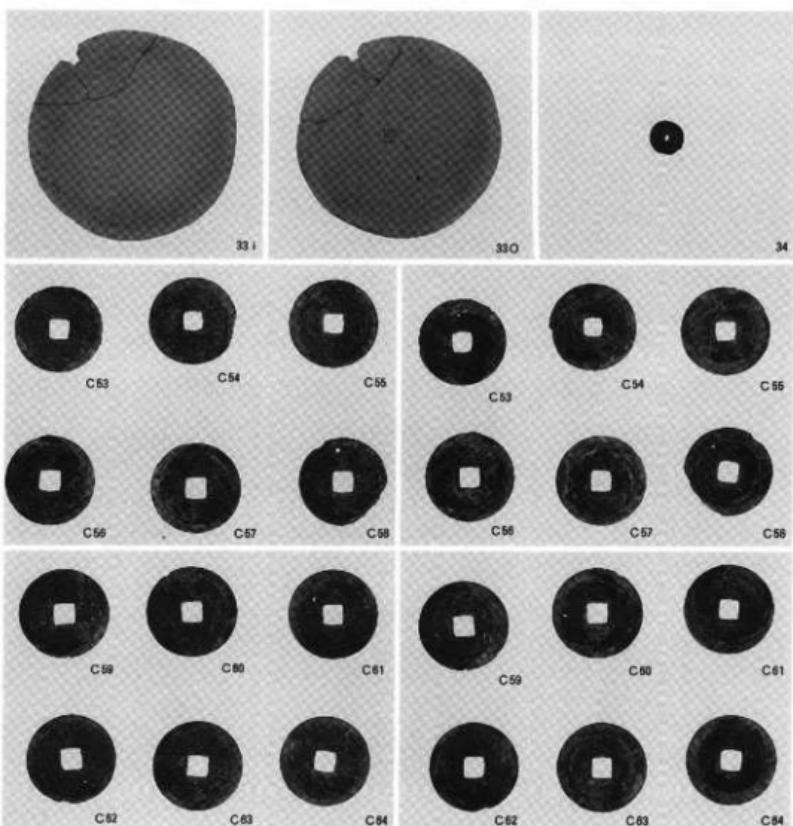
墓-10出土遺物



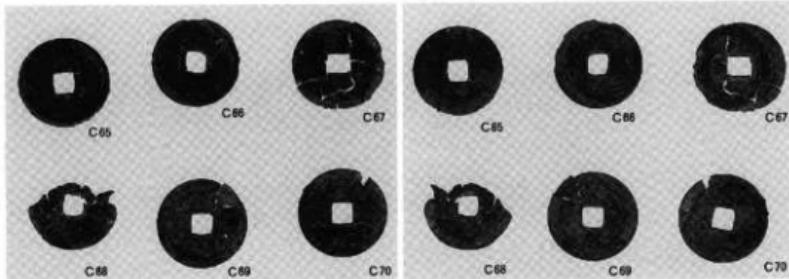
墓-11完掘状況(東より)



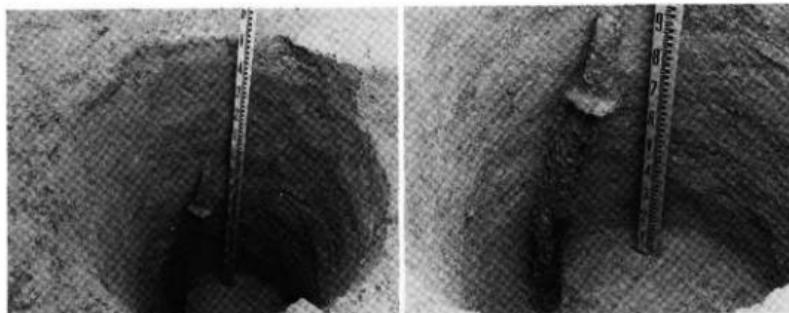
墓-11遺物出土状況



墓-11出土遺物

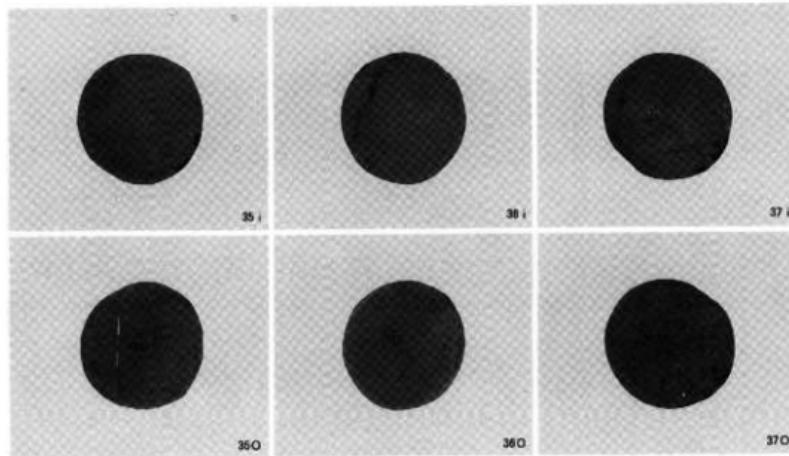


墓-11出土遺物



墓-12完掘状況（東より）

墓-12太刀出土状況

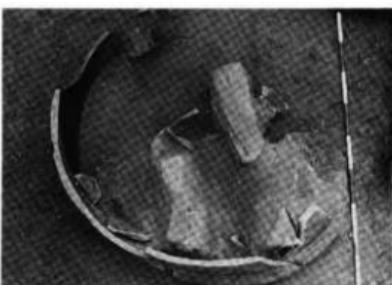


墓-12出土遺物



墓-12出土太刀

38



墓-13遺物出土状況（東より）

39



墓-13出土土器棺



墓-14土器棺出土状況（北より）

40

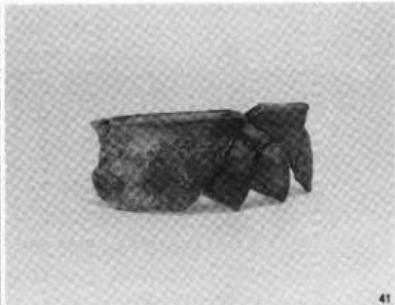


墓-14出土土器棺（下は窓記号）

40



墓-15土器棺出土状況（南より）

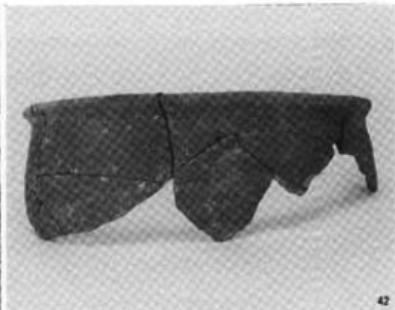


墓-15出土土器棺

41

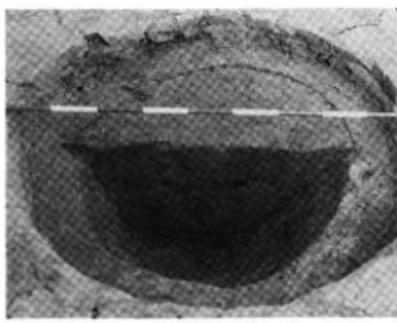


墓-16土器棺出土状況（南より）

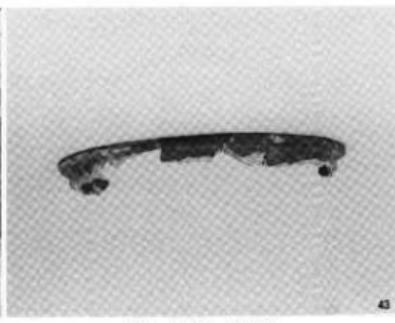


墓-16出土土器棺

42



墓-17半掘状況（東より）

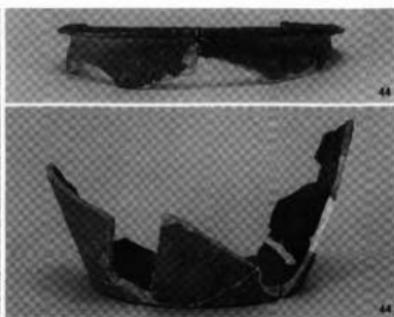


墓-17出土土器棺

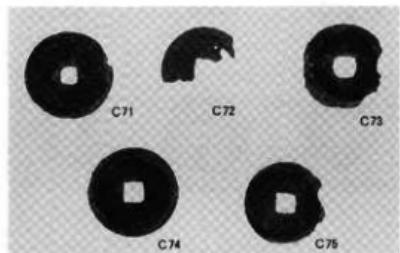
43



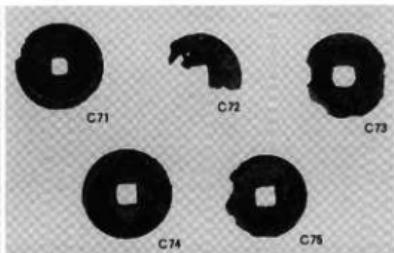
墓-18土器棺出土状況(東より)



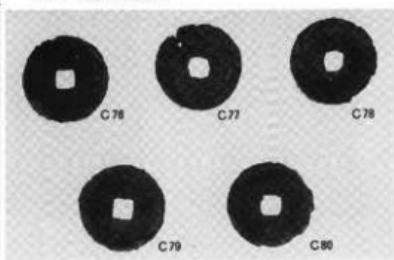
墓-18出土土器棺



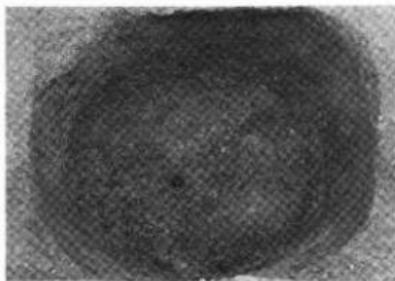
墓-19出土遺物



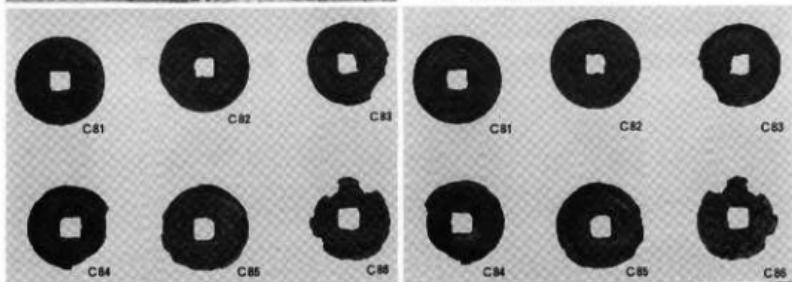
墓-20完掘状況



墓-20出土状況



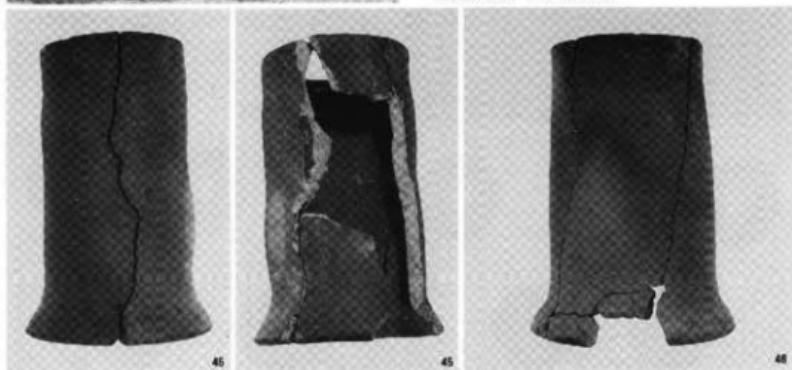
墓-21完掘状況



墓-21出土遺物

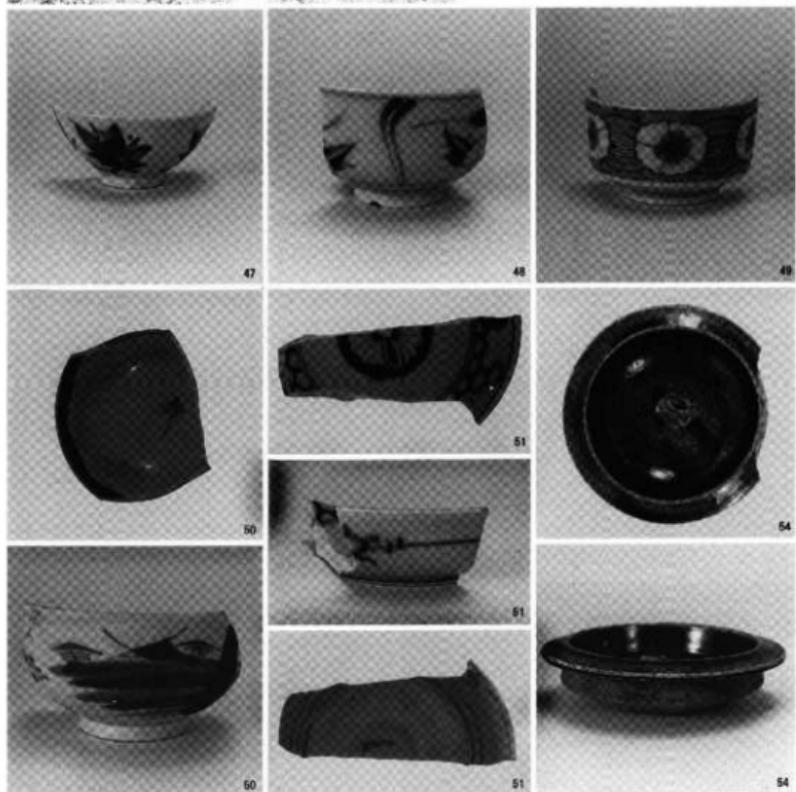


排水施設-01(東より)

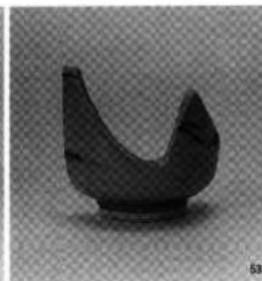
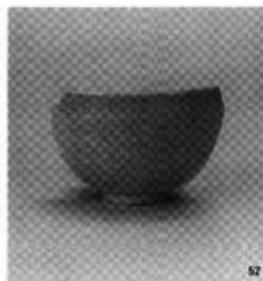




池状造構土層堆積状況（北より）



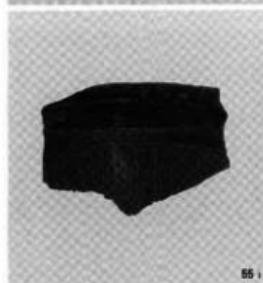
池状造構出土陶磁器



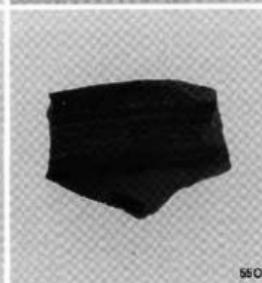
池状遺構出土土器陶磁器

57

58



59



60

58



56



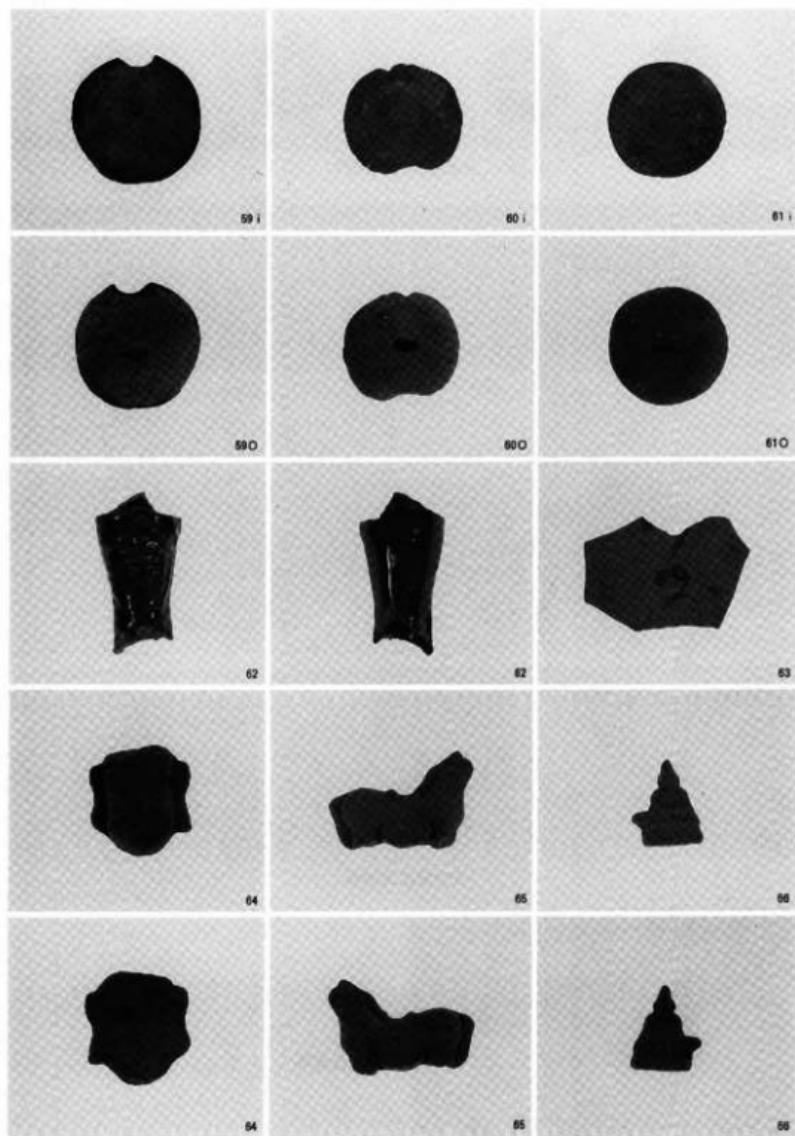
57



56



57



池状遺構出土土器・陶磁器・土製石



C87



C87



C88



C88

池狀遺構出土錢貨



67



68



69



69



69



69



69

包含層出土磁器



調查風景

大和郡山市文化財調査概要 30

**郡山城第36次
大職冠地区発掘調査概報（近世墓の調査）**

平成6年3月31日

発行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北部山町248-4

印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3-464